

調 査 報 告 書 に つ い て

3年男子生徒死亡に関する調査委員会

目 次

要約			
1 調査委員会	1		
(1) 設置の目的	1		
(2) 委員	1		
(3) 開催回数	1		
(4) 調査の経過	1		
(5) 調査委員会における事実認定 について	5		
2 本事案の概要	5		
(1) 2年時のA周辺の状況	6		
(2) 2年時のFの周辺の状況	7		
(3) 担任教諭の関わり	8		
(4) 3年時当初の状況	8		
(5) 体育祭前後の状況	8		
3 本事案発生の背景	10		
(1) 外的状況について	10		
① 学年の生徒の全体的な状況	10		
② 教員側の問題点	11		
③ Aに対する行為と内的状況 への影響	11		
④ Fに対する行為からAに派生 したこと	11		
⑤ Eの教科書をめぐる事件の影響	12		
a) 事件の概要	12		
b) 本事案との関わり	13		
⑥ 周囲からのAへの声かけとそれ に対するAの言動	15		
(2) 内的状況についての考察	16		
① 「遺書」について	16		
② 「遺言」について	17		
③ アニメの主人公やその主題歌 の歌詞への傾倒	18		
④ メールに垣間見える内面	20		
⑤ 自己紹介カード	21		
⑥ 塾で見せる姿	22		
		⑦ 感情の自己コントロールや行動 の特性	22
		⑧ 遺書の「困っている人を助ける。 人の役に立ち優しくする」とい う「目標」について	23
		⑨ Fを護ることへの思い	27
		⑩ 2年の時の行動、「いじられキャラ」 の定着に潜む内面の葛藤	27
		⑪ 3年での教科書の件と体育祭前後の 内面、自死の決意	29
		⑫ 修学旅行と最後のメール	32
		⑬ Aの内面の動揺と振幅について	32
	4	周囲の生徒たちの行為について	36
		(1) 遺書に名前のあった4人の行為について	36
		① Aに対する具体的な内容	36
		② Fに対する具体的な内容	37
		(2) 4人以外の生徒のAに対する行為 について	39
		(3) A・Fに対する行為の「いじめ」という 視点からの考察	40
	5	学校体制の問題点	43
		① 組織上の問題点	43
		② 生徒指導上の問題点	43
		③ 管理職のリーダーとしての問題点	44
		④ 保護者・家庭との連携上の問題点	44
	6	生徒のケアに関して	44
	7	再発防止に向けて	45
	8	まとめ	46

要約

男子生徒 A さんが、友人 F さんをいじめから護れなかったという内容を含む遺書を残して自ら命を絶った件について、調査委員会が、その背景を調査をしてきた。

自死までの経緯

(1) 2年時の A 周辺の状況

学年全体で、生徒が「いじる」という言葉で認識している行為が行われており、A は5月頃より「いじられキャラ」として、多くの生徒に「いじられていた」。10月頃より、同クラスの4名の生徒による「いじり」行為がエスカレートしていき、周囲には、やり過ぎだと感じ A のことを心配する生徒も出てきて、2名の生徒が担任に情報を伝えた。担任は A に対し「大丈夫かと」声をかけたが、A は「大丈夫」と答えた。

(2) 2年時の F の周辺の状況と A の反応

F に対しては、同じ4名の生徒が、5月より3月まで、本人が嫌がる言葉かけ、頭をはたく、蹴る等の行為を続けていた。A が何回か止めに入ったことがあったが、4人は逆に A に対し、F に対するのと同じような行為をした。F は辛い気持ちをずっと隠したままだった。3月頃、A は母親に F がいじめられていると打ち明けたが、4人の名前は言わなかった。

(3) 2年時の担任教諭の関わり

担任は、F へのいじめの状況は把握していなかった。またクラス内に「いじり」「いじられる」ような行為が行われていることは知っており、そのような行為を目にしたときは注意していたが、その中心的な対象が A であるとの認識は持っていなかった。

(4) 3年時当初の状況

クラス替えもあり、A・F への2年時のような行為はほとんど行われなくなったが、A が2年時の思いを完全に断ち切れた状況にはなかった。4月の家庭訪問の際に、新しい担任に対し A の母親が「A が、F がいじめられていると言っていたので気をつけて見てほしい」ということを伝え、担任は「注意して見ておきます」と答えた。担任はすぐに F に対し「嫌なことや心配なことはないか」と問いかけたが、2年時と状況が変わっていた F は「特にない」と答えたため、それ以上 F の心情や、他の生徒との関わりについて聞き出すようなことはしなかった。

(5) 体育祭前後の状況

A は3年時も同級になった4人の中の1人の生徒に対し、2年時から否定的感情を持っていた。体育祭の代休明けの5月18日に、応援団長として体育祭で応援最優秀賞獲得に大きく貢献したその生徒の教科書が、カッターで切り裂かれていたという事案が発覚し、当初はだれの行為かわからなかったものの、数日後に A が自分がやったことを認めた。担任は、その件に関することを双方の保護者に電話で伝え、双方了解のもと、事態を收拾していく方法を確認した。

その後、A の日常生活に特に変化は見られず、修学旅行でも変わった様子は見られなかったが、修学旅行明けの6月7日の午後、自死した。

本事案発生の背景等

外的状況として、①学年の生徒の全体的な状況 ②教員側の問題点 ③A に対する行為と内的状況への影響 ④ F に対する行為から A に派生したこと ⑤教科書をめぐる事件の影響 ⑥周囲からの A への声かけとそれに対する A の言動 を指摘した。

また、内的状況として、A が、理想として目指している自分と、現実の自分との間にギャップを感じ、悩み葛藤している内面の状況を考察した。

そして、周囲の生徒たちの A と F に対する行為と周辺生徒の状況について、その具体的な内容を調査・考察した結果、その行為と状態を「いじめ」と認定した。

また、生徒のケアの状況と、再発防止に向けて求められることについて言及した。

1 調査委員会

本事案に関する調査を、公平、客観的、中立的に行うために、学校が6月15日に調査委員会を設置した。

(1) 設置の目的

次の目的に基づく情報収集を行うに際し、その調査方法や調査結果の考察に関して意見を述べるとともに、本事案が発生するに至る事実関係を調査する。

- ① 中学校3年男子の死亡に関する背景等について
- ② 在校生の心のケアに関する体制について
- ③ 再発防止に向けた学校の指導体制について

(2) 委員構成

学校3名 保護者3名 地域2名 市教委2名 有識者1名 合計11名

(3) 開催回数

第1回6月15日	第2回6月22日	第3回6月29日	第4回7月13日
第5回7月22日	第6回8月22日	第7回8月25日	第8回8月27日
第9回9月第1週(予定)			合計9回

(4) 調査の経過

本事案の背景等を調査するに際しては、

- ① 遺書が存在し、そこに友人に対するいじめの記述があったこと
- ② 亡くなった生徒自身もいじめられていたと読み取れるような記述（「俺自身と、友人(実名)をいじめた連中が悪いんです」）があったこと
- ③ いじめを行ったとされる生徒の名前が書かれていたということ

この三つの事実を重要視し、男子生徒が自ら死を選ぶ外的状況の一つとして、周囲の生徒たちから、友人及び男子生徒に対して行われたであろう行為を明らかにしていくことを、調査の第一歩と考えた。

○6月8日(火)

その前段階として、いじめられていたとされる生徒とその保護者に対する、教員による聞き取りが行われた。

(内容)

- ・ 2年時11月～3月の休み時間に、遺書に名前のある生徒たちから、悪口を言われ、たたき、ける等をされた。
- ・ 期間が長く嫌だったが、いじめられているという意識はなかった。
- ・ 亡くなった男子生徒が止めてくれ、一時的に終わるが、別のタイミングで再開されることがあった。
- ・ 止めに入った男子生徒もやられることがあった。
- ・ 他に止めてくれた女子生徒が1名いた。
- ・ 3年になってほとんどなくなったが、同級になった一人の生徒からは、時々悪口やちょっかひがあった。

○6月14日(月)

- ・調査委員会の設置について、校長と市教委で目的・委員構成等を検討した。

○6月15日(火)

- ・遺書でいじめられていたとされる生徒の母親から、昨夜本人が本心を話したと、学校に連絡があった。

(内容)

いじめられていたという意識はなかったというのは嘘で、いろいろ言われたりやられたりしたことは、本当は辛かった。そのことを誰にも言えなかった。

- ・調査委員会に先立ち、学校として、いじめを行ったとされる生徒4名からの聞き取りを行った。その結果、それぞれの生徒が

- ①いじめられていたとされる生徒に対する問題行動をしたこと
- ②亡くなった男子生徒に対しても、いくつかの問題行動をしていたが、本人たちは一緒に遊んでいるという思いでやっていたこと
- ③男子生徒は嫌がったりせず笑って応じていて、やり返していたこと
- ④一度、他の生徒から注意されたこと、また担任からも一度注意されたこと

等がわかった。

そして、5名の生徒からの聞き取り内容の裏付けをすること、遺書に名前があった生徒以外について、問題行動をしたりされたりがなかったかどうかなど、学年・学級の状況を調査することの必要性などを調査委員会で検討していくこととした。

○6月15日(火)

第1回調査委員会

- ・委員会設置の趣旨等の確認
- ・男子生徒死亡についての概要説明
- ・学校によるそれまでの生徒からの聞き取りについて
- ・質疑、意見交換
- ・生徒向け調査の実施について
 - ①全校生徒を対象に
 - ②無記名で
 - ③「学校生活に係る調査」というタイトルで、「いじめ」(自分がされたら嫌だと思ふ行為)について、見たり聞いたりしたことを
 - ④記述式の調査票による調査このような形で調査することを決定。
- ・今後のスケジュールの検討
- ・学校の今後の取り組みについて説明

生徒向け調査は、

- ①6月16日に調査依頼と調査票を配付
- ②18日までに回収

③回収率は1年59%、2年66%、3年56%

回答率が低かったこと、また白紙での回答も相当数あったことは、本事案発生から日が浅く、多くの生徒が自分の思いを書けない、または書きたくないという状況で調査を行ったことの表れであろうと考察した。

○6月22日(火)

第2回調査委員会

- ・調査票による調査の結果わかってきたことについて
 - ①2年時を中心に、遺書に名前のあった生徒を中心に、いじめられていたとされる生徒と死亡した男子生徒に対して、いくつかの問題行動が行われたであろうこと
 - ②それを他の生徒が目にしていたであろうこと
 - ③3年時にも、他の生徒による同様の行為が行われていたであろうこと
 - ④他学年においても、いじめが行われている可能性があること
- ・追加調査の必要性について
 - より確かな情報を得るために、追加調査の必要性を検討し、
 - ①何人かの生徒をピックアップして聞き取りを行っていくこと
 - ②学年全体の生徒の状況を知るために、転勤した教員も含めて関係教員からの聞き取りを行うこと
- ・質疑、意見交換
- ・学校の取り組みについて
 - ・6月18日からの定例の教育相談においても、生徒のケアと情報収集を行っていくこと
- ・今後のスケジュールについて

○6月29日(火)

第3回調査委員会

- ・「いじめの定義」の確認
 - ・委員一人一人の考え
 - ・文部科学省の定義
 - ・川崎市の考え方
- ・聞き取り状況の報告
- ・聞き取り資料の読み取り
- ・質疑、意見交流
 - ・生徒のケアを第一に聞き取り範囲を広げることの必要性について
 - ①多くの生徒がまだまだ不安定であること
 - ②夏休み中の生徒の過ごし方に不安があること
 - ③より公平・客観的な資料を得るために聞き取りの範囲を広げる必要があること
 - ④調査に時間がかかることが予想されるため、関係者に中間報告という形で途中経過を報告すること

このような意見を取り入れ、3年生全員を対象として希望者の特別面談を実施することを決定。

- ・有識者委員による考察
 - ・人の痛みがわかるということの大切さについて
 - ・自殺の背景の考え方について（外的要因と内的要因が複雑に関係し合っていること）
 - ・遺書について

○7月13日（火）

第4回調査委員会

- ・特別面談の実施状況について
- ・特別面談での聞き取り資料の読み取り
- ・質疑、意見交換
- ・中間報告について

○7月22日（木）

第5回調査委員会

- ・その後の特別面談での聞き取り資料の読み取り
- ・中間報告の内容について
- ・質疑、意見交換
 - ・学年全体の状況や、遺書に名前があった生徒以外の行為もあったことを入れるべき
 - ・特別面談の聞き取り資料も、生徒の生の声として、遺族に情報提供したい。
 - ・特別面談の聞き取り資料は、他の関係保護者にも同様に見せるべきだ。
 - ・報告原稿に訂正確認は、委員長・副委員長で行う。

○7月24日（土）

遺族に対して中間報告

7月15日までに50名の生徒、13名の教員との面談を実施し、またその他数名の保護者・地域住民からの得た情報をもとに、関係者に対し中間報告を行った。報告の内容は、大きく3つであった。

- ①本事案の全体的背景と男子生徒の内的状況をさらに調査することの必要性
- ②主に2年時の二人の男子生徒に対する問題行動の状況
- ③学校体制の不備な点

以上のことと、最終報告を8月中に行う予定であることを報告した。

②については、生徒からの聞き取り資料をもとに、伝聞情報はすべて排除して生徒が実際に自分の目で見たことのみを抽出し、見た行為とそのときの自分が感じたことを、行為別に整理して報告した。

○7月24日（土）～27日（火）

関係保護者に対して中間報告

○8月13日（金）、16日（月）

有識者委員（精神科医）との相談

中間報告以後、亡くなった生徒の3年時の周辺の状況と、内面に関わる情報収集を行うために、補足の聞き取りを生徒23名、教員5名から実施し、その内容を整理して、有識者委員（精神科医）の意見を伺った。

それを受け、本報告書の原案を作成して第6回調査委員会に提示、意見交換を行い、その後、第7回・第8回・第9回調査委員会にてさらに意見交換を重ねて本日に至った。

(5) 調査委員会における事実認定について

本調査委員会は、強制的に何かを調べられるような権限を持つものではなく、また法的な位置づけがなされているものでもなく、「事実」の認定については、警察や司法の場のように厳密な考え方をとることはできない。

調査の中心的対象が中学生であること、また学校という様々な配慮と制約が求められる場での調査であることを考慮し、時間・場所・行為者等の詳細が特定されなくても、調査委員会として行為の客観性が認められると判断したことがらをもとに、本事案の背景を探っていった。判断の材料として次のものを活用した。

- ・在籍生徒延べ73人による聞き取り
- ・他校生4名からの聞き取り
- ・教員22名からの調査用紙による調査、
- ・教員18名からの聞き取り
- ・御遺族からの聞き取り
- ・保護者、地域住民4名からの情報
- ・亡くなった生徒が残した文書（遺書、遺言、メモ、手紙、メール、授業作品等）

2 本事案の概要

残された遺書には、

- ・ある生徒のことを護れなかったこと
- ・その生徒をいじめた4人を許すつもりはないこと
- ・自分もいじめられたとも取れる記述

が書かれていたため、以下関係生徒について、次のように記述する。

亡くなった生徒… A

いじめていたと名前のあった生徒… B・C・D・E

いじめられていたと名前のあった生徒… F

(1) 2年時のA周辺の状況

・2年生の5月頃より、Aはクラスの友人たちの求めに応じて、周囲を笑わせ楽しませるような行動をするようになり、A本人もそのような立場や行動を楽しんでいるような様子であった。

・その行動の内容は、ものまね・「ネタ」「一発芸」と呼ばれるような笑いを招くような行動・プロレスごっこのような「戦いごっこ」等であり、それを行っているAについて、多

くの生徒が「いじられキャラ」として、他の生徒に「いじられている」ような状況であったととらえており、いじめとの認識は持っていなかった。

- ・そのような行為は、A が自ら率先して始めることはなく、他の生徒からの求めに応じて行うことが多かった。

- ・しかし、10月の合唱コンクール終了後くらいから、B・C・D・Eを中心にした生徒のAに対する接し方、行動の求め方がエスカレートしてきて、周囲の生徒の中には、Aの肉体的・心理的な状況を懸念する思いが生じていた生徒もいた。

- ・その中の1人の生徒が、11月の定例の教育相談の際に、担任にAへの「いじり」が激しくなっていて心配であることを訴えた。

- ・それを受けて担任は、学級の様子を観察してその状況を確認し、クラスでの全体指導を行い、やり過ぎだと思いついた生徒は名乗り出るように話し、C・Dが名乗り出た。

- ・担任の全体指導とC・Dへの個別指導により、エスカレートした状況は一時的に改善された。

- ・しかし、しばらくすると、また同じような状況が出現し、その状況を担任が認識しないままに年を越した。

- ・担任や教科担任の教員は、このクラス内でそのような「いじり」が行われている状況を、好ましくないことであり大きなトラブルにもつながる危険性があるということを認知しており、その都度、その場の状況に応じた指導を行っていたが、「いじり」の中心的な対象がAであるという認識を持つことはなかった。

- ・教員による注意、指導の効果は、教員によって差異があり、あまり効果が上がらない教員もいた。

- ・1月に、1人の生徒が、担任にAへの「いじり」が激しくなっていて心配であることを訴えた。

- ・担任は、Aを呼び出して「大丈夫か」と声をかけたが、Aは「大丈夫」と答えたため、その状況をより詳しく確かめようとするのをしなかった。

- ・2月から3月にかけても、B・C・D・EのAに対する行為は続き、「いじり」の激しさが増していると感じた何人かの生徒が登下校時や塾で、Aに「大丈夫か」と声をかけることがあった。

- ・エスカレートした状況について、「回数が増え、しつこさが増した」「やらされているという感じが強くなってきた」「前半は4人の要求もA自身も遊び感覚だった。後半は、やっている4人がエスカレートしてきた。しつこさの点と、たたくことが多くなったという点で大きな変化が起こった」と複数の生徒が述べている。

- ・このような状況の中で、Aは「辛い」とか「苦しい」等の言葉は発していなかったが、下校時に特に仲の良かった友人に、B・C・D・Eについてのグチをこぼすことが頻繁にあった。

- ・一方B・C・D・Eは、Aに対する行為を、一緒に遊んでいるという認識で行っていた。

- ・A自身も行為を受けている最中に笑っていたり、同じような行為を4人にやり返したり、また他の友人とも同様の行為をやり合ったりしていることもあり、学級の多くの生徒は、「いじり」「いじられ」がエスカレートしている状態であり、ことさらAに対するいじめ的な行為としてはとらえていない生徒も多かった。

・またそのような状況を申し出ることに対しての、4人の反応を気にしていた生徒もおり、前述の2名の生徒以外にその状況を担任や他の教員に訴え出る者はいなかった。

(2) 2年時のF周辺の状況とAの対応

・Fに対しては、地域の同じ野球チームに所属しているC・Dを中心にB・C・Dの3人が、5月頃より3月末まで、休み時間を中心に、ほぼ毎日のように侮蔑的な声かけをしたり、手で頭をはたいたり、足で蹴ったりする等の行為が行われていた。Eは周囲にいて見ていたり、笑っていたりすることが多かった。

・Aは、小学校時代から、これは許せないと感じたことに対しては、周囲も驚くような思い切った行動で抗議したり反発したりすることがあり、Fに対するB・C・D・Eの行為に対しても、許せないという思いと、それを何とか止めたいという思いを強く持っていた。

・Fに関しては、「まじめ」「口数が少ない」「周囲に流されない」「勉強ができる」等の周囲からの評価があり、Aは小学校時代から地域の少年野球チームと一緒に練習し、小学校5年生から5年間一緒のクラスになり学級委員を務めたことこともあるFに対して、強い信頼感とともに敬意とも言えるような特別な思いを持っていた。AはFのことを「あんないい奴はいない」「あんないい奴がいじめられているのは許せない」と何度か周囲に語っており、Fを救いたいという思いで、B・C・D・Eの行為を止めさせようとしたことが6、7回あった。しかし、その行動に対して4人は、矛先をAに向け、Aに対してFにしたのと同様の行為を行った。

・Fは、そのような行為を受け始めた当初よりたいへん辛い思いを持っていたが、その辛さを周囲に漏らすことは一切しなかった。Aが亡くなった後、6月14日に初めて「本当は苦しく辛かった」と胸の内を母親に語った。

・Aは2月末頃のある日、家で口数少なく沈んでいる様子でいたことがあった。

・いつもと様子の違うAを見て心配した母親が声をかけると、Aは「僕の友達がいじめにあっている」と話し、初めはその名前を言わずにいたが、母親が思いつく何人かの名前を挙げていく中で、ようやくそれがFであることを認めて涙を流した。

・「いじめているのは誰か」という問いに対しては、具体的な名前は言わずに「4人」とだけ答え、そのうちの2人はFと同じ地域の野球チームに所属していて土日が心配だと言い、「あんないいやつがいじめられるのは、どうしても許せない」と泣きながら話した。

・母親は、Aの気持ちを受け入れながら、1人で立ち向かうのはたいへんかも知れないから、誰か一緒にやってくれる友達はいないのかと尋ね、Aは2人の友人の名前を挙げた。

・母親はAを励まして、困ったことがあれば言いなさいと話し、しばらく様子を見ようと考えた。Aはやっと落ち着いた状態になった。

・その後のFをめぐるAの状況について、A自身が家庭で特に何か話すことはなく、母親も特に声をかけることはないまま年度末を迎えた。

・Fに対するB・C・D・Eの行為を認知していた生徒は、クラス内に相当数いたはずだが、Fが嫌で迷惑そうな表情はするものの、はっきりした拒絶の行動に出ていなかったこともあり、担任や他の教員に報告することはなかった。F自身は「クラスのほとんどは知っていたと思うが、怖くて言えなかったんだと思う」と述べている。

・また、Aに矛先が向くような状況も報告されなかった。

・担任は、F 周辺のそのような状況を認知していなかった。

(3) 担任教諭の関わり

・担任は、クラス内に「いじり」「いじられる」ような行為が行われる人間関係が存在し、その背景には生徒それぞれの個性だけではなく、生徒間の力の差異も関係しているとの認識を持っていたが、B・C・D・E の「いじり」がエスカレートしているとの認識は持っていなかった。担任は、やり過ぎだと判断した行為については、その都度注意をしていたが、「いじり」の中心的な対象が A であるとの認識は持たないまま、その後、学級内を注意深く見守ったり、生徒から情報を得たり、A や B・C・D・E に対し直接的な声かけをしたり、保護者への連絡をしたりすることなく年度末を迎えた。

・「いじり」行為とは別に、学年内で教科書が隠されたり、靴が隠されたりするといういじめめ的な行為がたびたびあることを懸念していた担任（学年主任）は、月 1 度の学年通信で、学年内のそのような状況について保護者に伝えていた。

・そのような状況もあり、3月18日の年度内最後の学級懇談会では、保護者から、関連したいくつか情報が話されたが、担任は2名の生徒が懸念したような「いじり」の状況とは結びつけて考えなかった。

(4) 3年時当初の状況

・3年生になると、F が嫌がるような声かけを同級の C がすることがたまにあったが、2年時のようにグループでの F に対する行為は行われなくなった。A に対しても、4人または同級の C・E が、2年時のような行為を学級内ですることはなくなった。しかし、A は F への嫌な声かけを耳にすると直接注意することはしないものの、何か小声でブツブツつぶやいたり、下校時に4人の中の誰かから声をかけられた際、それを無視して嫌な顔をしたりした場面を複数の生徒が見ている。また、B・C・D・E の誰かから廊下に呼ばれると「めんどくせえなあ」と言いながらそれに応じ、戻ってくると表情が変わっており、声をかけにくい雰囲気を出していたこともあったと話す生徒もいた。A が2年時の思いを完全に断ち切れた状況にはなかったことがうかがえる。

・4月になってから母親がFのことを聞くと、A は「(4人のうち) 2人が別のクラスになったので、前よりはだいぶおさまった」と答えた。

・4月の家庭訪問の際に、新しい担任に対してAの母親が「Aが、Fがいじめられていると言っていたので気をつけて見ていてほしい」ということを伝え、担任は「注意して見ておきます」と答えた。

・担任はすぐにFに対し「嫌なことや心配なことはないか」と問いかけたが、3年になってから状況が変わっていたFは「特にない」と答えたため、それ以上Fの心情や、F・AとB・C・D・Eとの関わりについて聞き出すようなことはしなかった。

(5) 体育祭前後の状況

・Aは3年時も同級のEに対して、2年時から否定的感情を有していた。それは、Eが周辺の生徒や通りがかりの生徒に対し、乱暴な行動をすることがあることを、許せないという思いから生じていたためと推察される。多くの生徒がEがそのような行動をしていたこ

とを話してており、Aがそのことを怒っていること、またAとEがお互いに嫌い合っていることを感じていた。またE自身も、Aの性格や自分に対する態度が嫌いだったと述べている。そのようなAとEは、3年生になってから直接的な関わりをすることはほとんどなかったものの、お互いに口げんかをしたような場面は何人かの生徒が見ている。

- ・Eが体育祭応援団長に、Cが副団長になり5月10日より体育祭練習がスタートした。EとCが団長・副団長になったことに對し、Aは仲のいい友人に否定的な言葉を言っていたが、「体育祭でやる気を全開」することを年度当初の目標に掲げていたAは、熱心に練習に参加し、応援団長として頑張っているEを見直したという発言を友人にしたりすることもあり、応援への取組にも意欲的であった。

- ・また、体育祭前日には、体調不良で早退したEに對し、クラス全員で励ましの手紙を書き、AもEへの感謝の気持ちを綴ったメッセージを書いた。

- ・5月15日に行われた体育祭は、Aの所属するクラスが、応援最優秀賞を獲得した。E団長のもと、クラスが一致団結したことの結果を、クラス全員で喜び合った。

- ・体育祭の代休明けの5月18日に、Eの教科書がカッターで切り裂かれていたという事案が発覚した。当初はだれの行為かわからなかったものの、すぐにAがやったのではという噂がかなり広まった。また他からの情報もあったため、担任がAへの聞き取りを行うと初めは否定したが、数日後にA自身が自分がやったことを認めた。

- ・担任は、その件に関することを双方の保護者に電話で伝え、双方了解のもと、教科書の弁償と、当人同士の謝罪を行うことで、事態を収拾することを確認した。

- ・担任立ち会いのもと、事実関係を確認した後、AがEに謝罪、EのAに對する行為については、Aはその謝罪はその場では求めず、担任の指導に任せる形を希望した。(教科書の件については、後で詳述)

- ・その後、Aの日常生活には特に変化は見られず、日々の授業や部活動、また修学旅行の準備を行っており、家庭においても家族が何か変調を感じるようなことはなかった。

- ・Aと特に仲の良かった生徒の一人は「自分たちだってわからなかったのだから、先生にわかるはずがない」と述べている。

- ・そのような中、Aは5月29日にホームセンターでトイレ用洗剤を購入し、その後インターネット通販を利用して農薬購入を申し込み、修学旅行開けの6月7日の午後、母親が仕事で不在である時間を指定して、配達を依頼した。

- ・6月4日から6日まで関西方面修学旅行。旅行中、特に変わった様子は見られず、出発前には友人に對し、「短い時間だけど楽しもう。特に部屋で過ごす時間が楽しみ」という内容のメールを送っており、事実、部屋の中では同部屋の友人たちとかなり積極的に楽しんでた。

- ・修学旅行の振り替え休日であった6月7日午後、自宅1階のトイレ内で、購入した物品により硫化水素を発生させ、自死した。

- ・その直前、14人の友人に對し、死を暗示する内容のメールを送っていたが、それ以前にも、Aはふざけていると思えるようなメッセージを4月1日と5月15日に送っており、6月7日のメールも、受け取った多くの生徒たちは以前同様Aらしい悪ふざけと感じていた。何人かの生徒は返信したが、Aからの返信はなかった。

- ・トイレ内には家族宛ての遺書が残されていた。(内容については後で詳述)

・また、A の学習机の中から、特に仲の良かった25人の友人に宛てたメッセージが書かれた「遺言」と書かれたA 4版の紙が発見された。

3 本件事案発生背景

人が自ら命を絶つこと背景には、さまざまな外的要因と内的要因が複雑に関係し合っていると言われている。

本調査委員会は、前述の1(5)でも述べたように法的な位置づけもなく、様々な制約のある中で調査を行わざるを得なかったため、より多くの生徒の証言を根拠に、客観的な事実を明らかにすることに務めながら、本件事案発生背景を調査した。

(1) 外的状況について

① 学年の生徒の全体的な状況

・今回の事案が発生した要因の一つとして、学校内における生徒の全体的な行動の状況が、問題点として浮かび上がった。

・当該学年の生徒男女比は、男子82名、女子40名というたいへんアンバランスな状況にあり、1年時より、多数を占める男子生徒の落ち着きを欠く行動が目立っており、また「うざい」「きもい」「死ぬ」等の攻撃的・排他的な言葉を日常的に口にする事が多く、背中や肩を叩き合ったり、人に飛びついたり、教室や廊下で押し合ったり取っ組み合いをしたりするような乱暴な身体接触もよく見られるような状況であり、そのことを学年職員も生徒指導上の課題としてとらえていた。

・しかし、組織的・継続的な有効な指導が行われず、また生徒自身の自発的・自治的活動が展開されることがないまま、そのような状態が3学年になるまで続いていた。

・そのような状況の中、お互いに言葉や動作として、いわゆる「ちょっかい」をかけ合うような行為が頻繁に行われ、さらにそれがエスカレートして、お互いを叩き合ったり、言葉での言い合いをしたり、またそのような行為を他の生徒に命令的に行わせたりするという行為が、男子生徒の中で日常的に行われるような状態であった。

・本件事案の重大な背景として、そのような行為が行われていたことがあり、ほとんどの生徒はそれを、「いじり」という言葉で、また「いじり」をされやすい生徒のことを「いじられキャラ」という言葉で認識していた。また、そのような状況を教員も知っていた。

・Aは2年生になると「いじられキャラ」としてのふるまいを周囲から求められることが多くなり、本人もそのような立場での行動を演じながら、周囲を盛り上げ、笑いを取ったりして自分の存在感を示すようになり、教室内でのそのような立ち位置が定着していった。

・Aに対し「いじり」を行う生徒は、そのときの状況によってさまざまであったが、次第にB・C・D・Eが行うことが多くなってきた。

・当初はそのような状況をAも積極的に受け入れ、自分も他の生徒に「いじり」を行うこともあったが、B・C・D・Eを中心とした行為が次第にエスカレートしていき、それが「いじり」「いじられ」という言葉の中に一括りにされてしまい、行為がAに与える肉体的・心理的な影響を覆い隠してしまうような結果となった。

・このような、男子生徒同士での「いじり」「いじられる」状況は、3学年になっても継続しており、A自身も仲のよい友人同士で「いじり」「いじられる」ような行為を頻繁に

行っており、それをお互いに楽しみ合っている様子であったが、それを「いじめ」と感じたり、女子生徒の中には冷ややかな目で見ている生徒もいた。

・このような状況は、当該学年に限ったことではなく、学校全体に同様の雰囲気や傾向があったことも垣間見られる。

・当調査委員会では、学校全体の状況までは確実な把握はできなかったが、今後学校が、その実態を的確に把握して、早急に改善に取り組むべき課題の一つとして認識している。

②教員側の問題点

上記①のような、生徒の全体的状況を改善できなかったことは、本事案の背景として重要であると考えられる。詳細は「5 学校体制の問題点」で述べるが、a) 組織上の問題点 b) 生徒指導上の問題点 c) 管理職のリーダーとしての問題点 d) 保護者・家庭との連携上の問題点 の4点において、学校の指導体制に問題があったと判断した。

学校が一丸となった組織的な取組がなされておらず、情報の共有化も不十分であった。また、生徒指導の基本的なスタンスにも問題があり、有効な生徒指導体制が作られていなかった。さらに、管理職の在り方、保護者との連携にも問題があった。

③Aに対する行為と内的状況への影響

学年の男子生徒を中心とした前述のような状況の中で、Aに対する「いじり」行為、またそれがエスカレートしていった状況は、外的な要因の一つとしてAの内的状況に影響を与えたと考えられる。詳しくは、後述するが、A自身の「自分をさらけ出していくこと」に疲れたという「遺言」の中の言葉、また「みんなが求める自分と本当の自分とが違っていて悩んでいる」という友人に宛てた手紙の中の言葉には、思春期の中で自分自身を見つめ、自己の在り方に心を悩まし、もがいているA自身の葛藤の様子が垣間見られる。

A自身が本当に求めていた自分の姿は、周囲の生徒や大人にはほとんど見せていないが、わずかに残されたAの足跡からAの心の中をのぞくことができた。

Aは、「いじられキャラ」として周囲から求められる行動に応えている自分を、自分自身が本当に求めている自分らしい自己として受け入れられていない状況であることが推察され、周囲の求めに応じて「いじられキャラ」を演じていたことは、Aの内部に自己矛盾・自己破綻を生じさせていたであろうことが推測される。

特に、2年時後半のB・C・D・Eによるエスカレートしていった行為については、苦痛を直接訴えることはなかったものの、Aは仲のいい友人に毎日のようにグチをこぼしており、長期にわたる行為がAに対し心理的圧迫を加え、Aの中に自己否定的感情が蓄積されたと推測される。

④Fに対する行為からAに派生したこと

AとFは小学校の時に地域の少年野球チームと一緒に活動しており、小学校5年生から中学校3年生まで5年間同級であった。周囲の状況に流されて理想の自分を見失っていると感じているAにとってFは、野球の技術においても、学習面においても、学級内での活動においても、自分にはない確固たるものを持っていると感じる頼もしい存在であり、強い信頼感とともに敬意にも似た感情を有している特別な存在であった。学校内で特に仲良

くする姿は見せなかったが、校外でAの親友を交えてFと遊ぶことがたまにあり、そのときにはたいへん仲の良い姿を見せていた。そのFに対しB・C・D・Eが行っている行為を許せないという思いを、Aはたいへん強く持っており、ときおり周囲にその気持ちを伝えていた。亡くなる直前の修学旅行中の6月5日にも、班行動の際に、友人にその思いを伝えていた。FがB・C・D・Eからの行為を受けていると、Aは何度かそれを止めさせようと行動したが、それを果たせず、逆に自分が同様の行為を受けるような結果になった。

このことは、自分の意に反するほどの行為を求めるようになったB・C・D・Eに対する反感と一体となって、Aの内面を揺り動かすことにつながったと判断できる。Fに対する行為から派生することは、Aの中でこうありたいと理想としていた姿、つまり許せないと感じる行為に抗議して、困っている人を助け、優しい人間として人の役に立ちたいという姿、そんな理想の自分を否定することにもつながり、二重の意味で、Aの葛藤に通じていく外的要因となったであろうと考えられる。

⑤Eの教科書をめぐる事件

AとEは2年時に続いて3年時も同クラスになった。2年時から、お互いに相手のことをよく思っておらず、周囲の生徒の中には、そのことを本人から聞いたり、感じたりしていた生徒もいた。

a) 事件の概要

・体育祭練習期間中の5月8日か9日、友人と2人で下校中だったAは、忘れ物を取りに行くと言って1人で教室に戻り、Eの教科書等4冊をカッターで切り裂いた。

・体育祭明けの5月18日にE本人が、国語の授業の際に気づき教科担任に申し出たが、そのときには国語1冊のみの被害しかわからなかった。

・すぐに教科担任から学級担任に事実が伝わり、担任は学年主任と相談して、その日の帰りの会で全クラスから情報を求めることにしたが、特に関連情報は得られなかった。

・翌19日の朝学活で、当該クラスにおいて担任が無記名の記述式調査を行った中に、Aがやったということをはのめかしたり、断定したりする情報が複数出てきたため、担任はAに事情を聞いたが、Aは否定した。

・Aの名前が挙がってきたのは、A自身が何人かの友人に自分の行為であることをほのめかしたことで、日頃のAとEとの良好でない関係から、AがEに悪感情を抱いていることを知っているクラスメイトが、おそらくAだろうと推測したことによる。

・その後、授業が進むにつれ、切られたのは国語の教科書だけではなく、理科、音楽、歌集の計4冊であることがわかった。

・その後いくつかの情報を得た担任は、5月21日にAを呼んで事情を聞いたが、Aは当初は否定した。

・しかし、そのときEに対する思いを聞かれたAは「2年生のときからちょっかいを出されていた。いろいろ言われたりして、むかついていた。うざい、あっち行けなど、自分だけでなく他の人にもやっつけてむかついていた。」と答えた。

・担任の「ちょっかいて暴力？」という問いには「いや、そうじゃなくて、通りすがりにちょっかいをされる。」と答え、「今は？」という問いかけには「今はそんなにない。たまたま言葉ではある」と答えた。

・教科書を切ったことについては、何度聞いても「記憶にない。友達が言っていることと違うがやっていない。」と言った。

・担任は「何とか解決しなくてはいけないから、もう一度みんなに聞くことになる。自分の記憶にないところで刃物を使った可能性があるならば、家の人とも相談しなくてはいけない。真実は必ずあるはずだから、思い出したことがあったら教えてほしい。」と言って帰宅させた。

・その日の夕方、本人から担任に電話があり「よく思い出してみると自分がやった。親には言わないでほしい」と言ってきた。

・担任は「真実が見つめられて、自分で自分の行動を認められたことは大きな成長である。ただし、保護者の方には伝えなくてはいけないことなので、まずは自分で話してごらん」と伝え、土日の二日間様子を見ることにした。

・その後Aは自分で保護者に伝えることができなかった。

・5月24日に担任がAを指導し、Eの教科書を切る行動に出してしまった心情を聞いた。「今までに、いろいろと言われたりやられたりしたことがしゃくだった。自分だけではなく、他の人にもやっているの、ついやってしまった。」とAは答えた。カッターを持ち歩いているという噂のことを聞くと、「今は、カッターは持っていない。ハサミで切った。」と答えた。

※調査委員会で4冊の現物を確認したが、ハサミではなくカッターで切ったものであると判断した。なぜ、ハサミと言ったのかは不明だが、後述する「上履き紛失」の件との関わりを感じさせたくなかったとも考えられる。

・担任は、5月26日（水）の放課後AとEを呼び出し、謝罪の場を設けた。担任は事前に、Eの行動についてAが謝罪を求めるかを聞いたが、Aは担任が指導してくれればいと答えた。AがEに謝罪した後、Aがこのような行動をしてしまった経緯をEに話し、Aは退席した。担任はEに対し、Aの心情を説明し、この事件は、E自身の言動が引き起こしたことでもあることを指導し、その点については反省を求めた。

・その後、担任は両家の母親に、事実関係と指導の内容を電話で伝えた。Aの母親には、このような行動に出たAの心情について、「いろいろと積み積み積もった思いがあったようで。」と伝え、教科書の弁償について依頼した。Eの母親には、Aがやったという事実とその理由、教科書の弁償の件、謝罪の状況等を伝えた。

・切り裂かれた4冊の教科書の現物を見たのは、担任、学年主任、学年職員、教頭、校長であったが、指導の経過と結果については担任からの報告を受けたものの、そのような切り裂き方をしたAの心情を丁寧にすくい取ることの必要性や、AとEとの関係を再確認することの必要性を提案する教員はいなかった。

b) 本事実との関わり

・Eの2年時のA・Fへの関わり方は、B・C・Dに比べると関わりが薄く、直接手を出すことをあまりせずに、一緒にいて近くで見たり笑っていたりすることが多かった。特にFに対しては、F自身も「Eはあまりやらなかった」と言っている。

・しかし、Eが他の3人と異なるのは、クラスメートや他のクラスの生徒にも、多くの生徒に暴力的な接触をしていることで、聞き取りをした多くの生徒がそのことを認め、自分

徒に暴力的な接触をしていることで、聞き取りをした多くの生徒がそのことを認め、自分もやられたと言っている生徒も多かった。

・4人グループでAやFに行う行為だけではなく、そのような他の生徒に対するEの行為を2年時にずっと見てきたAは、4人の中でも特にEを許せないという思いを高めていったと考えられる。

・事実、特に仲のいい友人との下校時に、Aがグチを言っていたのは、Eについてのものが圧倒的に多かったと、友人たちが言っている。また、「肩パン」についても、Aは「Eのはマジ痛い」と友人の一人に訴えている。

・また、2年時に同級だったAの友人の一人は、2年時にEにやられた行為を「何でもありだった」「自分に対してだけではない」と語っており、自分ことを「クラスの中で、僕は人権がないから」とまでAに訴えていた。Aは「そんな自虐的なことを言うな」と応じ、「いつかちゃんと注意しなきゃ」と話していたという事実がある。

・3年生になって、状況はだいぶ変わったものの、同じクラスにC・Eが在籍し、Fへの行為も完全になくなったわけではなく、時折FへのCの言動が目につく中で、Aは2年時に感じた四人への思い、特にEへの反感は解消されないまま、その感情を沈めていくことができていなかったと考えられる。

・「2年の時は一部の特定の人にグチを言っていた。3年では、野球部全員や学級の仲のいい友達全員にグチを言う感じだった」「EとCへのグチが多かった」との生徒の言葉からも、そのことが推察される。

・そのような中、Aが年度当初「体育祭でやる気全開」と目標にしていた体育祭の練習が始まり、その応援団長にEがなったことで、否定的思いを抱いているEに協力せざるを得ない状況になったAの中には、複雑な思いが生じていたであろう。Aは、そのような思いをぶつける対象としてEの教科書を選んで切り裂き、それを体育祭後に見つけたEが、自分自身を省みるような展開になることを想定し、行った行為だと推測することもできるだろう。

・しかし、前述したように、教科書を切り裂く行為をした後で、Aは応援団長として頑張っていたEを「見直した」と発言したり、感謝の気持ちを表す手紙を送ったりもしており、自分の行為とその後の自分の思いとの落差に、内面が揺れていたことも考えられる。

・体育祭直後に撮ったチーム全員の写真には、カメラに背を向けて顔を全く向けていないAの姿があり、その日に多くの友人に死を暗示するようなメール（「燃え尽きて真っ白な白い灰になった」「俺が死んでも悲しまないでくれ」等）を送っている事実もあり、体育祭直前に教科書を切った行為と、その後の体育祭終了までの展開が、Aの内面に何らかの影響を与えていたことが推察される。

・Eの教科書が切られた件は、発覚直後からAがやったという噂が流れ、その後A自身もそれを認めたことで、学級内にはAの想定外の雰囲気が生じていた。

・Eの日頃の言動をころよく思わず、Aのとった行動に理解を示す生徒も何人かいたが、体育祭で応援団長として1, 2, 3年生のクラスをまとめて応援賞受賞に大きく貢献したEに対し、そのような行為をするのは許せないという思いを持った生徒も多かった。

・しかし、体育祭明けからは、すぐに修学旅行に向けての準備に慌ただしく入っていく状況の中で、この教科書の事件と、それをめぐる生徒の様々な思いは、はっきりと顕在化する

ることなく、過ぎていった。

- ・5月24日にEの教科書を切り裂いたことを家で話したAに対し、母親は「Fをいじめていた中にEもいたのか」と問い、AはEを含めてB・C・Dの名前をそのとき初めて母親に伝え、「Eは特に許せなかった」と話した。

- ・その際、母親はAの心情には理解を示しつつも、行った行為が間違っていたことを説諭した。

- ・その後、5月26日にEへの謝罪に臨むAに対し、母親はきちんと謝罪するとともに、そのような行為に至った自分の心情をしっかりと伝えるよう助言した。

- ・しかし、帰宅したAは「あんな奴に何を言っても無駄だ。早く終わらせたかったから一応謝罪したが、形のうえだけ謝った」と言って、その後は話しをできるような状況ではなかった。

- ・Aは、親しい友人にも「形だけ謝った」「まったく反省していない」とも述べており、体育祭後も周囲の微妙な反応を気にすることなく、Eへの否定的感情を持続させていたことがうかがえる。

- ・Aが自らの死を決意したのは、体育祭直後であったであろうことが推測されるが、その1週間ほど前に教科書を切り裂いたAの思いと、その後の体育祭に至るまでの展開、またその直後の事件発覚後の展開が、一度決めるとそれを通そうとする性格のAの決意を、さらに強めていったことも考えられる。

- ・また、この教科書事件に表れたAの激しい思いを、学校においても、家庭においても、何らかの形ですくい取ることができていたら、その後のAの行動に制御をかけられていた可能性も考えられる。

⑥周囲からのAへの声かけとそれに対するAの言動

- ・Aの周囲にいた生徒たちは、「いじられキャラ」としてAの振る舞いを楽しみつつも、次第にAの反応が当初と異なってきたことを感じ、笑いながら振る舞っている中にも、笑いの質が以前とは違ってきていると感じて、それぞれにAに対し「大丈夫か?」とか、「最近やられていない?」とか、「何か気持ちを隠していない?」等の声かけをしていた。

- ・それらに対し、Aは「大丈夫」と答えるのが常であり、「本当は辛い」とか「嫌だ」とか「自分に対する行為を許せない」等の言葉は言っていない。

- ・しかし、Aと親しい友人たちは、Aは弱音を吐かない性格で、「大丈夫?」と聞かれて「大丈夫ではない」などとは絶対に答えないと述べている。

- ・この学級の中には、F以外にもいじめめ的な行為を受けていると自覚していた生徒が複数いたことが調査の中でわかってきたが、その中の一人は、前述のように2月頃「クラスの中で僕には人権がない」とAに語り、それに対してAは「そんな自虐的なことを言うな」と声をかけ、「いつかちゃんと注意しなきゃ」「俺もBとかと仲良くしなきゃクラスがまとまらない」とも語ったと述べている。

- ・A特有の正義感を高める中で、Aが自分ができる行動として「いじられキャラ」を演じることで、力関係で上位にあるグループの者にも物申せるような関係を作り、その関係性の中で、Fやその他の生徒の役に立つような自分を作りたいと考えた可能性も考えられる。

- ・しかし、結果的にそれは果たせず、周囲から自分を心配する声が多くなっていったこと

にも、ジレンマを感じていたと考えられる。

(2) 内的状況についての考察

約100人の生徒や教員からの調査内容を手がかりや根拠にして、Aの内面の葛藤や自己矛盾といった内的状況についての考察を行った。そして聞き取り以外の手がかりとして、Aが遺した遺書や遺言、詩歌の作品や引用、手紙等があった。

Aが残した遺書や遺言の記述、詩歌や物語の創作や引用、手紙等の内容は、A特有のもの感じ方や考え方によって支えられていた。それらは、周囲から求められる「いじられキャラ」としてのAとは違う、独特な言葉へのこだわりや特性を示している。また、これらをAは多くの生徒とは共有しなかった。だからこそ、創作や引用された詩歌や物語について、A特有の内面的な特徴を支え、表すものとして、Aの中に強く息づき、考えや行動との関連性が高いものだと捉えた。

したがって、考察の手がかりや根拠の中に、それらの要素も取り入れることにしたという経緯である。

①「遺書」について

a) 内面の揺れ動き、葛藤

「遺書」の前半には、Aの内面の揺れ動き葛藤がよく表れている。

- ・2行目で「目標」についてふれている。「困っている人を助ける。人の役に立ち優しくする」という目標である。
- ・その反面、3行目では「でも」の逆説で始まり、「現実」を綴っている。「人に迷惑ばかりかけて、Fのことも護れなかった」という「現実」である。5行目、6行目も「現実」とそれに対する自責の念が綴られている。「こんな俺が、人並みに生きて、友達を作って、人生を過ごしていく・・・そんなことがあっていいはずないんです。俺がいて不幸になる人は大勢いる。それと同時に俺が死んで喜ぶ人も大勢いるはずです」という綴りである。
- ・「こんな俺」の「こんな」が指すのは、この文面の限りでは、「人に迷惑ばかりかけ」、「Fも護れなかった」という「俺」である。「Fも」の「も」が「を」ではない点も見逃せない。「も」が示しているFとは別の、護るべき大切な人(自分自身も含めて)や大切なもの、あるいは大切な考え方や生き方は何だったのか?という問いが生まれてくる。
- ・6行目から7行目にかけて、「俺がいて不幸になる人は多勢いる。それと同時に俺が死んで喜ぶ人も多勢いるはずです」という言葉も、それが示す対象が誰なのかという問いと共に、Aが人から自分を認められたり受け入れられたりしているという受容感や自尊心の持ち方について考えさせられる。
- ・「遺書」はこの後、「でも」で始まる文が2回続く。前半の11行だけで3回それが繰り返されている。自責や無念さと「現実」の間を、ふりこのような振幅を伴って揺れ動く内面の葛藤が、文章の短さ故に逆に際立っている。しかも、その葛藤が単一の要素による葛藤ではなく、重層構造をなしているとも思わせる文面である。

b) 遺書の17行目の句点の位置

- ・「俺が死ぬのは家族のせいじゃありません。俺自身と、Fをいじめた連中が悪いんです」。

この17行目の後半にあたる、「俺自身」と「F」の間に句点が入っている。この句点があることで、「悪い」のは「俺自身」と「連中」の両方を示している。そうすると、自分自身を「悪い」と言ったり、「人に迷惑ばかりかけて」と書いたりしている理由は何かという問いも生まれてくる。

- ・また、この句点の位置に、意識的な配慮がないとすると、いじめられていたのがAとFの両方だったという捉えにもつながる。

c) 言葉への独特なこだわり、辞世の句の引用

- ・「遺書」の19行目の「哀しまずに」や遺書とは別の「遺言」の3行目の「最期」等の漢字表記に見られるように、言葉に対する独特の感覚が見受けられる。これは、後述するアニメや漫画の主題歌の歌詞に対する傾倒と、そこからの影響等が少なからず関連していると推察される。また、歌詞や詩からの引用を嗜好する面があり、自らの詩や短歌等の創作にも影響を与えている。

「遺書」の最終行に以下の短歌が示されている。

〈君がため、尽くす心は水の泡、消えにし後は、澄み渡る空〉

これは、土佐藩の武士であった岡田以蔵の辞世の句である。

- ・辞世の句とは「死に際に残す詩歌」である。この句については様々な解釈があると言われている。特に、「君がため」の「君」が誰を指しているのかという点である。岡田以蔵の場合は、「天皇」や「藩主」という捉え方ができると言われている。藩のために尽くしたその結果が、斬首なのかという無念の気持ちが出ている歌だという解釈もある。
- ・Aがこの句を引用したことで、人の役に立ちたい、困っている人を助けたいというAの目標と、しかし結果として報われなかったというような心情が、ここで改めて表現されていると推察される。

②「遺言」について

「遺書」とは別に「遺言」の存在がある。そこには父母、祖母、兄、そして25人の友人それぞれに送った言葉が一枚の用紙に綴られている。

a) 「遺言」の2行目の言葉

- 「俺は、自分をさらけ出して生きていくのも、人に迷惑をかけていくのにも疲れしました」
- ・この中で、「自分をさらけ出して生きていく」という言葉が出てくる。「遺書」では綴られなかった言葉である。この言葉が、遺書でも綴られていた「人に迷惑をかけて」という言葉と並列に綴られていることを考えると、遺言の2行目の「自分をさらけ出す」とは、ある意味で遺書の2行目に綴られている「『困っている人を助ける・人の役に立ち優しくする』それだけ为目标に生きてきました」という目標の達成のためにとった、Aの様々な行動の数々だと推察することができる。つまり、目標とする自分を「さらけ出して生きていく」という捉え方である。
 - ・その一方で、「いじられキャラ」として、自分としては完全に納得していないことをや

っている自分のことを指して、「さらけ出して生きていく」と捉えられる面もある。

・つまり、この言葉については、推察そのものも揺れ動く要素をもっている。

b) Fへの言葉かけ

「遺書」の3行目で「護れなかった」と言っているFに対して、「遺言」では次のような言葉を綴っている。

- ・「Fは最後まで何もしてやれなかった。本当にゴメンな……。また、Cとかクラブチームの奴にやられたら、親や友だちに相談しな。お前は優しいから、誰にも迷惑かけたくないと思っているのかもしれないけど、それは違うぞ。人は支え合って生きていくもんだからな。時には人の手を借りて、背負わずに生きてほしい」。
- ・この言葉について、「まるでAが自分自身に言っている言葉だ」と話している生徒もいた。

c) 人の嫌がることを言わされる自分との葛藤

2年、3年と一緒のクラスだった生徒の一人は、「Aの印象は嫌な人」と話している。そして、3年になって一緒のクラスになりたくない3人の生徒の中の一人にAの名前を挙げている。2年の時に、Aが他の生徒にやられる感じで、自分の悪口を言っていたことがあった。そして、そのことについて、「いつか謝ってもらおうと思っていたのに、こんなことになってしまい」とも付け加えている。

「遺書」や「遺言」の中の「こんな俺が」、「人に迷惑をかけて」という言葉の背景につながる部分だとも推察される。そして、こういった半面、Fが嫌な行為を受けているのを止めたり止めようとしたりしているのである。

③アニメの主人公やその主題歌の歌詞への傾倒

3年になって、アニメの話題が合う友達との、楽しそうな会話の姿が見かけられている。しかし、話題を共有していた生徒でさえ、ほとんど知らなかったのが、アニメの主題歌の歌詞についてである。

a) 歌詞に重ねる自分、自分に重ねる歌詞

Aがメモ用紙に視写し、学習机の中に残した歌詞には、以下のような節が見受けられる。

- ・「軋んだ想いを吐き出したいのは存在の証明が他にないから」「歪んだ残像を消し去りたいのは自分の限界をそこにみるから」「会いたくて愛しくて触れたくて苦しくて届かない伝わらない叶わない遠すぎて今はもう君がいないよ」(月光花)
- ・「最後の嘘はやさしい嘘でした」(嘘)
- ・「今、オレは何を信じて、この胸に何を託して走るのか」「野望をけちらす魂の叫び」「傷ついた日々の向こうに何を見つめて」「未来に伝える熱い想い」「世界を導く一すじの光」(ソウルテイカー)
- ・「期待とは裏腹に後退する気分」(IN MY DREAM)
- ・「何もできない自分隠して本当を失くした」「見えないものを見ようとすれば険閉じるそれだけでいい 君がここにいないとしても」(今宵月が見えずとも)
- ・「救いのない魂は消えゆく 消えていく瞬間にわずか光る」「悲しみの息の根をとめてくれよ」(メリッサ)

これらの歌詞に共通する一つの側面として、自分が意識的にもっている使命のような激

しく強い思いと共に、それが叶わないことへの不安や焦りが歌われている点である。Aが視写したこれらの歌詞への傾倒に、Aの内面の機微が見え隠れしていると推察することもできる。

- ・ Aが音楽の曲想は二の次で、歌詞に対して惹かれる傾向があることについて話す生徒もいる。
- ・ 2年時の文化祭にも出展された俳句には、前述の「月光花」の影響を受けたと思える内容を、当時の教科担当教諭や生徒が覚えていた。その句には「月光花」という珍しい単語があったのと同時に、「闇に咲く花」という言葉があったことも覚えている生徒がいた。それは前述のソウルテイカーの歌詞である「世界を導く一筋の光」にも重なる。「闇に咲く花」＝「月光花」は、不安や葛藤状態の闇を、希望へと導く一筋の光だと解釈できるかもしれない。

b) 死の直前の内面を伝える歌詞

6月7日に、Aが自ら命を断つ直前に、多数の生徒に送信したメールの中で、「今の俺の感情は、シドの『レイン』と同じかな」という一節がある。

- ・ シドというバンドの『レイン』という曲の歌詞を以下に引用する。

く六月の嘘 目の前の本当 セピアにしまいこみ
寄り添うとか 温もりとか わからなくなった

「君はひとりで平気だから・・・ね」と 押し付けて さよなら
その類の気休めなら 聞き飽きた筈なのに

鳴り止まない 容赦ない思い出たちは 許してくれそうにもない
目を閉じれば 勢いは増すばかりで 遠巻きで 君が笑う

雨はいつか止むのでしょうか ずいぶん長い間 冷たい
雨は どうして僕を選ぶの 逃げ場のない 僕を選ぶの

やっと見つけた 新しい朝は 月日が邪魔をする
向かう先は「次」じゃなくて「過」ばかり追いかけた

慰めから きっかけをくれた君と 恨めしく 怖がりな僕
そろそろかな 手探り 疲れた頬を 葛藤がこぼれ落ちる
過去を知りたがらない瞳 洗い流してくれる指
優しい歩幅で 癒す傷跡 届きそうで 届かない距離
雨は いつか止むのでしょうか ずいぶん長い間 冷たい
雨は どうして僕を選ぶの 包まれて いいかな

雨は 止むことを知らずに 今日も降り続くけれど
そっと 差し出した傘の中で 温もりに 寄り添いながら>

- ・「逃げ場のない僕」、「頬を 葛藤がこぼれ落ちる」、「冷たい雨は どうして僕を選ぶの 逃げ場のない僕を選ぶの」、「向かう先は『次』じゃなくて『過』ばかり追いかけた」、「寄り添いとか温もりとかわからなくなってた」という言葉に特に注目した。
- ・命を断つ直前に送信したAのメールの言葉からも明らかであるが、Aが内面の拠り所として、「レイン」の歌詞に、自分自身の気持ちを重ねていたのは明らかである。そこからは、「誰に寄り添い」、「誰のために尽くしていくのか」、そんなことを自問し、葛藤しているAの内面が浮かびあがってくる。

c) 『鋼の錬金術士』の言葉、台詞について

Aが愛読していた『鋼の錬金術士』『北斗の拳』『ブリーチ』等にもあてはまるが、主人公が親しい仲間や家族との死別を通して、様々な学びや糧を得て成長していくという大筋である。しかも個性的な登場人物たちが、死に際に印象的、象徴的な言葉を発するという点でも共通している面がある。歌詞への傾倒と共に、主人公の兄弟をはじめとする登場人物たちの言葉に、Aが日頃から影響を受けていたことは、生徒からの聞き取りからも明らかかなことである。

- ・『鋼の錬金術士』の話は、主人公の兄弟が、幼き日に亡くした母親を錬金術の禁じ手を犯して、蘇生しようと実行するが、その代償に弟の命と、自分の足を失うことになる。そして、母親の蘇生にも失敗する。弟の魂は自分の腕を代償に取り戻し、鎧に装着させることができる。二人は、禁じ手のさらなる実現に向けて、当てのない旅に出る・・・という話である。その連載開始の冒頭に次のような言葉がある。

「痛みを伴わない教訓には意義がない」

「人は何かの犠牲なしに何も得る事などできないのだから」

また、第二巻には

「人間なんだよ たった一人の女の子さえ助けてやれない ちっぽけな人間だ」という雨中での主人公の台詞がある。

- ・塾で一緒でもあった生徒は、2年の時に、「俺が（遺書で記名した生徒と）仲良くしなきゃクラスがまとまらないよな」と言って、その生徒たちと、わざと一緒にはしゃいでいたAのことを話している。それらの行動と、前述のアニメの「痛み」「犠牲」という言葉とを重ねるのは、無理な推察なのだろうか？

④メールに垣間見える内面

メール（直筆の手紙も含む）による交流は、日常的にAと多くの生徒との間で行われていた。遺書や遺言、歌詞等にAの内面を考察する手がかりがあるが、メールの中でも、内面を吐露している側面があると考えられる。

a) 「みんなが求めている俺と現実の俺」

- ・亡くなる一週間くらい前に送った、1人の生徒へのメール(手書きの手紙も含む)には次のように書かれていた。

「みんなが求めている俺と、(現実の)俺が違うので、どうしていいかわからない。悩んでいる」。

- ・別の生徒は「Aは、学校でも塾でも元気だった。でも、学校の元気さは“いじられキャラ”としての元気さで授業中の大声にしてもやらされている感があった。塾では“下ネタ”等を自分から大声出して言っていた。塾の方がAらしい」と話している。
- ・メールの中で「落ち込んでいる時、大丈夫?とってくれた」と話す生徒もいた。そして、「Aは自分の時は、大丈夫、大丈夫と言う。俺はそんないい人じゃないし、やさしくないよと、自分のことになるとブルーで自虐的な人だった」とも話している。
- ・2年の終盤である3月の卒業式の2日前に、親しい友人にメールで、ある生徒のうわばきを切り裂いて隠すことを告白している。「俺はあいつが嫌い」という言葉も添えられていた。Aは親しい友人とは、普段から愚痴や不満をこぼし合っていた。しかし、自分の内面や心情の深い部分について開示することはほとんどなかった。

⑤「自己紹介カード」、口癖

a) ヘタレ

3年になって書いた自己紹介カードの〈私はこんな性格と自己分析します〉の項目に次のような記述がある。

「挙動不審で、何事にもためらいがちなヘタレです」。

- ・「ヘタレ」の部分¹を太字で書いているので、目を惹く。
- ・〈将来の夢・希望〉の項目では、「多くの人に貢献できる仕事」と書かれている。そして、〈新しいクラスみんなに思うこと〉の項目では、「体育祭でやる気を全開に・・・」と書いている。

b) ミラメノス

自己紹介カードの〈私は〇〇と呼ばれています・〇〇と呼んでほしい!〉の項目では、氏名に「ミラメノス」というミドルネームを入れている。

- ・「ミラメノス」は、プレイステーションポータブルの『モンスターハンターポータブルセカンドG』の武器アイテムのひとつのようである。
- ・笛のようなアイテムで、攻撃力の高さと共に、多人数プレーでの防御における、仲間へのサポート効果が高く、その点で類を見ないと評価されている。Aがその特性を意識して、「ミラメノス」と書いたか否かはまったくわからない。しかし、「多くの人に貢献できる仕事」という記述と「ミラメノス」との間につながりがある²と考えることに、偏った無理はない。

c) 口癖

- ・Aの両親は、「Aは、“俺なんて”というのが口癖みたいなところがありました」と言っている。「ヘタレ」という言葉や、前述の生徒の「自虐的な人だった」という言葉とも重なる。

⑥塾で見せる姿

a) 喜怒哀楽を姿として見せていた塾生活

塾で「Aの本当の姿が見られた」という生徒の声があった。

- ・人からやらされるのではなく、自分からお茶らけて、生き生きとしていた姿が見られている。また、体育祭の後に、机に伏せている姿が頻繁に見られるようになったことを気

にしている生徒もいた。体育祭前は、新しく入塾した生徒とふざけあって元気そうだったのととても対照的で印象的だったと見ている。

- ・喜怒哀楽を行動としてはっきり示しているという意味で生徒たちは「塾で“本当の姿”を見せていた」と評価している。

⑦感情の自己コントロールや行動の特性

a) 感情の起伏や振幅の大きさ

生徒の多くは、Aが「感情をためこむタイプ」だとか、「怒ると周りが見えなくなる」「怒ると激しい」、「切れる」、「オーバーヒートしやすい」、「喜怒哀楽が激しい」、「気分屋」、「真面目な時とふざけている時の差が激しい」等の見方をしている。

- ・それは、学校だけではなく、塾で一緒だった生徒も言及している。
- ・特に親しい生徒も同様な評価をしている。小学校時代に喧嘩をして、激しい感情の昂ぶりを見せ、高学年の頃、先生に怒られて、先生に向かって定規を投げている場面を見ている生徒もいる。
- ・先生に怒られて「自殺してやる」と言っていたのもこの頃で、実際にはそのような素振りを見ている生徒は少ないが、そのような言葉を口にしていたのを実際に聞いている生徒がいた。

b) 周囲を驚かすような行動

小学校の修学旅行の言葉

- ・6年生の修学旅行で宿泊した旅館の土産売り場で、児童が騒いでいたことを学校長が注意をしたことがあった。
- ・Aが、その時の注意の言葉づかいに対して納得せず、修学旅行の到着式での活動を振り返る場面で、大勢の前で抗議をしたことを学校長や教諭、生徒のそれぞれが覚えている。
- ・その行動に対して、「正義感や勇気がある」と評価している生徒が多い。
- ・その反面、「目立つための行動のひとつ」、「人と違う不思議な人」等と見ている生徒もいる。

c) 中学校1年のカッターの件、先生への反抗的な態度、2年での抑制

- ・中学1年時、Aが、授業中に執拗なちょっかいを出してくる生徒に怒り、カッターナイフで相手を傷つけたことがあった。カッターをもった手を前に伸ばし、その結果、カッターの先が相手の手の指にかすった。
- ・傍で一緒に活動していた生徒が、たまたまもっていたカッターをAに渡したということである。

また、1年時に些細なことがきっかけで授業中に喧嘩になった。この際にAも含む3人の生徒が放課後、学年主任や担任に指導されている。

- ・指導中にAが「舌打ち」や「歯軋り」等をしたために、学年主任が怒り、2人の生徒を帰宅させ、Aだけ残した。Aが、「なぜ俺だけなんだ」と激昂したために、保護者も学校に呼ばれるという経緯も加わった。

1年時の喜怒哀楽の激しい表出とは対照的に、喜怒哀楽の激しい表出は、1年時に比べると表面的には目立たなくなる。そして2年になると「いじられキャラ」が定着する。その反面AとFは、3年間で最も高い頻度で、言葉や身体的な暴力を受けていた時期で

もある。

- ・2年時に、喜怒哀楽の表出が表面的には最も目立たなかったことは、内面の考察という視座からすると、見逃せない部分ではある。つまり、感情が抑制され、内在化したのではないかという危惧である。それが「いじられキャラ」との兼ね合いでバランスがとれている間はよかったが、過度のストレスとして、徐々に内面に蓄積されていったと考えた時の危惧である。

d) 3年での教科書の件

- ・3年の5月にAは、遺書に記名された生徒Eの教科書等4冊をカッターナイフで切り裂いている。

e) 衝動性とは対照的な、死への計画的な行動

- ・これまでいくつか例示したできごとや行動から、感情が高まった時に、我を忘れてしまうような行動傾向があり、時として、感情面の自己コントロールに難儀していた面が伺える。
- ・そのような面を、「遺言」の2行目の「自分をさらけ出して生きていく」と捉えられるのかは迷うところではある。しかし、その反面、自らの命を断つに到るまでの過程では、衝動性の対極にあるような遺書や遺言、そして大量のメール送信と死に至らしめる材料の購入準備等に見られる、念入りの計画の足跡が残されている。
- ・両者には大きなギャップがあり、Aのもつ極端な対比性のもうひとつの側面として捉えられる要素でもある。
- ・それと共に、Aが傾倒した歌詞やアニメの主人公の生き方等との関連性として捉えることもできる。つまり、3-3で指摘した、「痛みを伴わない教訓には意義がない」、「人は何かの犠牲なしに何も得る事などできないのだから」という『鋼の錬金術士』初巻1ページの2行の言葉である。Aが自らの死をもって得ようとしたこと、あるいは得ようとした教訓は何かという捉え方である。
- ・A自身は、そこへの覚悟が決まっているからこそ、使命感にも似た意欲を伴い、一件冷静に見られるような念入りのメッセージの表現につながっているのではないかと推察する。
- ・これらの一連の行動は、『鋼の錬金術士』の「等価交換」の発想に近似している。自らの命を犠牲に、その代償によって何かを得たり成し遂げたりするという発想である。
- ・A自身は、死に至る過程で、ひとつひとつの準備に自己実現にも似た歩みを見せている。しかも、A独特の引用の多様により、周囲へのメッセージ性が結果としてより高まっている事実がある。

⑧遺書の「困っている人を助ける。人の役に立ち優しくする」という「目標」について

遺書に示された「目標」への「試み」と思われる行動は、Aの周囲の様々な場面で捉えられている。

a) 兄への密かな敬意

- ・高校生の兄が中学校時代、不登校の友達に寄せた思いやとった行動について、先生からも高く評価されていることをAは知った。
- ・それは、Aの兄が、不登校の友だちを家に迎えに行き、やさしい言葉かけをする行動だ

った。

- ・ Aが、「俺もああいうことをやりたんだけど、できないんだよな」と話すのを、両親が聞いて覚えている。
- ・ 両親も、Aのこのような気持ちを知って、驚いたことを話している。

b) 「夢は警察官」

- ・ 小学校高学年の時のAの夢として警察官になることを覚えている生徒がいた。「高学年の時、夢は警察官になることだった。Aはある意味、正義感が強いという見られ方はあてはまる。自分がやることに真っ直ぐ貫く人」と話している。また、この生徒はAのことを「人のいいところをみられる人」だとも話している。
- ・ 小学校時代のある教諭は、Aが、「〇〇さんが、〇〇さんに対して行っている態度は許せない」と一度言いに来た時のことを覚えている。生徒からの聞き取りでも、Aの「正義感」について指摘している生徒が複数いる。

c) お礼の手紙

- ・ Aが亡くなった後、一年生のサポート級の生徒からAに手紙が届いた。
- ・ そこには、朝、登校時に自分とAが、共通の生徒の家に迎えに行くのに、呼び鈴を鳴らす時間がよくかちあったことが綴られていた。そんな時にAが自分にあいさつしてくれたり、先に呼び鈴を鳴らすように譲ってくれたりやさしくされたそう。そのことのお礼の手紙だった。

d) 生徒の声から

通夜、告別式の納棺時に寄せた生徒たちのメッセージがある。

- ・ 「2年の後期に委員会の委員長になった時、原稿用紙と質問用紙を無くして困っている時に、一緒になって質問の回答を考えてくれた。Aがいたから生徒総会うまくいきました」。
- ・ 「新体力テストの時に、Aは終了しているのにもかかわらず、誰かと走った方が記録も伸びるからと一緒に走ってくれた」。
- ・ 「私が悩んでいたら話しかけてくれたり困っている時は手伝ってくれたりした」
- ・ それと共に、「Aはいいやつだから人に言われたことは嫌とは言わなかった」、「熱くてとてもいい人だったけど、ほかの人の期待にこたえすぎてしまう部分もあったので、そこに気づいてあげられてとめられていれば少し変わったのかもしれないと思う」、「Aはいつも俺のわがまを聞いてくれてうれしかったし、今は謝りたい。どんな気持ちでオレのわがまを聞いていたのかわからなかったよ。今考えるとイヤイヤやったこともあったと思う」といった声もある。
- ・ これらの生徒の声をもとにしても、「遺言」の2行目、「自分をさらけだして生きていく」ということが、感情を真っ直ぐ表面に出していくことなのか、周りが求める自分を出していくことなのか、それとも両方のことなのか、推察を迷わせている。そして、ここでもAが直面したであろう内面の葛藤の複雑さが推察される。

e) 小学校時代の運営委員会、中学校での生徒会への立候補

小学校時代の複数の担任教諭は、決して器用ではないが、少しずつ努力して、他者から認められようとしているAについて語っている。

- ・ 応援団になり、学習発表会のミュージカルでは難しい役に挑戦し、運動会実行委員では

学年種目の企画運営に携わった。また、高学年では運営委員会に立候補し、地道によく活動したことを評価されている。

- ・そのような過程を経て、中学校へ入学した。中学校では、学校生活のことをあまり話さなかったAが、1年の駅伝の時は、よく話をしていたと家族が覚えている。それだけ頑張ったという自尊心の高まりがあったようだ。
- ・その駅伝を横に置いてでも、立候補したのが生徒会だった。小学校の時から経緯からつながって考えれば、決して唐突なことではない。小学校時代からAを知る生徒は、立候補は、小学校の運営委員会からの流れであると指摘している。遺書に書いた「目標」のために具体的な試みを自ら課していた事実の数々が浮かび上がる。

f) クリスマスの兄弟の話

- ・2年の時の国語の「30秒スピーチ」で、Aは、クリスマスの兄弟の話を創作し発表している。
- ・クリスマスが近づく季節に、貧しい兄弟が暮らしている。幼い時に両親と別れた弟は、子守唄をきいたことがなかった。だから、心から欲しいオルゴールだった。それに気づいていた兄は一生懸命に働き、食事もとらずにオルゴールを購入する。しかし、その代償はあまりにも大きく、兄はこの世を去ってしまうという話である。
- ・以下に、クリスマスの兄弟の物語を引用する。書かれたのは2年生の12月17日である。

ある所に、二人の兄弟がいました。兄は16歳、弟は10歳の幼い兄弟です。両親には、先立たれ、兄は弟を養うために、町外れの小さな製鉄所で毎日こつこつと働いていました。弟はそんな兄を見て、兄にだけは迷惑をかけたくない」という気持ちを抱いていました。

時期は冬、クリスマスの日が近づいていました。町は賑わい、子どもたちはおもちゃ屋に目が釘付けです。弟も一瞬目を向けましたが、すぐ目をそらします。兄にだけはこのことを知られてはいけない。」そう感じたからです。しかし、兄はその姿を見ました。弟が毎年この時期になると、おもちゃ屋に目を向けるのを兄は知っていました。弟は3歳の時に両親先立たれたため、子守唄というものを知りませんでした。だから、オルゴールを欲しがっていました。兄は、「今年こそは・・・」と密かに思ったのです。

でも、現実には、お金がなく、食べていけないのがやっとなのでした。兄は考え、ある手段を思いついたのです。後日、兄は弟に、「今年はお前がよく我慢して良い子にしたからサンタさんが来るんだよ。」と言いました。弟は首を傾げましたが、兄は続け、「信じて待っていれば必ず来るから。」と言い残し、いつも通り仕事に行きました。

そして、クリスマスの日はやってきました。夜に仕事は終わり、帰りにおもちゃ屋に寄り、オルゴールを買って行き家に向いました。

翌朝、弟は何かの音で目覚めました。目を向けてみると、まずオルゴールが目に入りました。次に目に入ったのは横になっている兄の姿。

「ああ、帰って来たんだ」。

そう思いながら兄に触ってみました。

「冷たい」。

弟はつぶやくと、そのことを悟りました。兄は死んでいたのです。兄があの時とった手段・・・それは、自分の命を削ってまでお金を貯めてオルゴールを買うというものでした。

弟は、「そうだ、寝ているんだから子守唄を歌ってあげよう」。

そう言って、オルゴールに詩を乗せながら兄を見送りました、流した涙は海になり、やがて真っ白な鳥に変わりました。

普段、家族と過ごしている時や友人と一緒にいる時にこの話を思い出してみてください。当たり前前の日常がどんなに心温まる事か、それを感じてください。

これは、あるクリスマスソングの由来とされる話です。普通は恋人向けと思われませんが、この様に考えた人もいたのです。この歌の冒頭部分の「雨は夜更け過ぎに雪へと変わるだろう」、あなたは思うのでしょうか？それはあなた次第です。

- ・上記の引用の最後の三行部分（手書きメモの七行分）は12月17日のスピーチでは、読まれなかった部分である。
- ・この発表の時に関連して、教科担任が、A自身の将来についての質問をしたことを覚えている生徒がいた。その時、Aは、「将来人を助けて、役立つ人になりたい」と言っている。ただ、言い方や表情も含めてどこまで本気でどこまでふざけているかが周囲にわかりづらいところがあったとも話している。
- ・そういった行動は同時に、「いじられキャラ」として、結果的に、真意を曖昧にしてみよう危うさでもある。「真面目な顔でおもしろいことを言うキャラクターが定着しているので、どこまでが、本気なのかわからない。30秒スピーチでも、シリアスな内容にもかかわらず、途中で笑いが起こり、本当は読むはずだった7行分の文は読まなかった」と話す生徒がいた。
- ・前述した創作物語にも表れているが、弟のために頑張って努力し、目標をめざすが、行った努力が報われているように見えて、その代償があまりにも大きい点に特徴がある。
- ・また、兄に心配をかけようとしない弟の耐える姿や、その気持ちを察し、さらに耐えて暮らす兄の気持ちも描かれている。Aの内面の目標や理想の部分と重なる要素だと推察される。
- ・2年生の2月に、AはFがいじめられていることについて、母親に相談したことがある。その時も、いじている生徒の名前は言わず、自力で何とかしようとする姿勢を見せている。クリスマスの物語の兄弟が、相手を思いやり、お互いに自分の気持ちを悟られないようにしている姿に近似している。
- ・さらに、兄弟の設定で、信頼関係に支えられながら、お互いを思い合うという設定は、『鋼の錬金術師』の物語設定と重なっている。
- ・クリスマスの物語の終末近くで、「当たり前前の日常がどんなに心温まる事か、それを感じてください」という記述がある。また、「信じて待っていれば必ず来るから」という記述にも、Aの伝えたい内面が映し出されているように推察される。この物語や『鋼の錬金術』の物語が、この時期のAに少なからず影響を与え、逆にAの内面の心情が、これらの作品や創作に投影されていたとも推察する。
- ・これらのことに、遺書の最後の行の岡田以蔵の辞世の句も重なる。「尽くしても水の泡

になってしまう思い」に、Aは自分の置かれている状況や内面の葛藤、矛盾等についての自己投影を行ったのだと推察される。

- ・ここで改めて際立つのは、自尊感情の低さである。「俺なんて」という口癖や自己紹介カードの太字の「ヘタレ」がここに再び重なってくる。「挙動不審で何事にもためらいがちなヘタレです」。それでいて、そういうヘタレの自分自身に決して満足はせず、理想や目標への挑戦をし続けるという側面が確かに見受けられる。

⑨ Fを護るということへの思い

a) 護ることへの挑戦

通夜、告別式の納棺時に寄せた生徒たちのメッセージがある。そこでFは、次のようにその思いをAに寄せている。

- ・「中学校へ行って俺が困っている時に助けてくれたのはAだけだった。本当に本当に心強かった。みんな知らんぷりしている中で助けてくれて、言葉では表せない感謝の気持ちでいっぱいです。逆にAが困っている時に俺は助けてあげる事ができなくて本当にごめんなさい」。
- ・Fは、野球が巧く、自分にはない面をもっているのも、AはFに一目置いていたと見ている生徒の話がある。また、AとFは放課後お互いの家を行き来したり、一緒に遊んだりする友達でもあった。実際にAはFが嫌な行いをされていると止めに入ることはあった。それは、F自身もそうでない生徒も見ている。

b) 誤解一周圍の目に映る姿

- ・しかし、前述しているように、Aが止めに入っても、そのまま周囲がじゃれ合いと呼んでいるような行動に笑いながら入っていく姿を見ると、一緒に仲間としてやっていると周囲の生徒に映ってしまう曖昧さがあったことは否めない。
- ・「いじられキャラ」の定着と、その背景にあるAの思いにギャップが生まれていく過程が、Aの内面の葛藤のひとつとして大きく焦点化されてくる。

⑩ 2年の時の行動と、「いじられキャラ」の定着と内面の葛藤についての考察

a) 「俺が頑張んなきゃ」という言葉

友達と、学級のことを話し合うような場面で、クラスの状態を話すことがあった。

- ・話をする場で、Aは、「俺もBとか4人と仲良くしなきゃクラスがまとまらない」と話している。
- ・またEの日常的な暴力について、「いつかちゃんと注意しなきゃ」と話している。
- ・そういう会話の中で、一度、Aが、「俺が頑張んなきゃ」という言葉を言ったことがあった。
- ・ある生徒がDの行動についての愚痴をこぼすと、「Dもいいところがあるから」とAが話している。
- ・これらの言葉を話している1月～2月の時期は、Fがいじめられていることで、Aが母親に初めて相談している時期と重なる。Aの母親は、信頼のおける友だちや先生への相談も含めてAにアドバイスを送り、励ましている。この時期は、Aがやられている行為（あるいはやらされている行為）に対して、拒否の態度をとっている姿があったことを、

生徒が見ている。また、「パンツ下ろし」の頻度が高かった時期でもあった。

- ・母親への相談や友だちとの話の中で、自分が何とか行動して、現状を変えたいと思っていたことが、結局思うようには行動につながられずにいたことが伺える時期である。

b) 「いじられキャラの定着」が生み出す自己矛盾についての考察

- ・「いじられキャラ」として周囲の笑いを誘う存在としての定着が、周囲からの「期待」に応えるということの「定着」にもつながっていたと推察する。
- ・この場面では、こんなことをしてくれるだろう、真面目な顔でおもしろいことをする人等、一体、本気なのかふざけているのかわからない曖昧さを求められている自分を打破できない状態が続いていたのは事実である。
- ・そういう状態が続いていたこと自体もAは肯定したいわけではなく、真面目とふざけの境目はどこなのだろう？という曖昧さを、自身も次第に本意だと感じながら、「俺が頑張んなきゃ」という気持ちが空回りしていくという「自己矛盾」の状態は依然として続いていたと推察される。
- ・そのことが、自身やAの父親が言う「ヘタレ」な状態なのである。それらの経緯が、長い時間をかけて、「いじられキャラ」と「目標にしている自分の姿」との間の軋轢や矛盾を深刻にしていったとも考えられる。

c) 「ちゃんと注意しなきゃ」「仲良くしなきゃ」「頑張んなきゃ」の考察

- ・友だちに言ったという「ちゃんと注意しなきゃ」という言葉は、「いじられキャラ」の定着のために、本気なのか？ふざけなのか？という曖昧さの中でぼやけていった経緯が推察される。また、注意や拒否の言葉を伝えた相手が、他者の訴えや小さな喧嘩等への理解の姿勢があるか否かにもかかわってくる。
- ・さらに、「仲良くしなきゃ」という、「ちゃんと注意しなきゃ」と一見矛盾するような言葉も、「かわりながら、注意したい」、「いじり合いながら注意したい」という、周囲からの誤解を招くような、それでいて、Aらしい行動によって、一見曖昧に見える行動につながっている。それらは、「笑っていた」と生徒の目に映り、「嫌がっているのかふざけているのか迷った」という周囲の生徒の発言を生む背景にもなっていると推察される。
- ・このように考えていくと、2年生の一年間を通して、「いじられキャラ」の定着に至る過程と、それによって生じていく自己矛盾の過程は、並行しながら、皮肉にも比例関係のようにその度合いを増していったことは否めない。
- ・Aの「頑張り」は、手応えを得られないまま、2年生を終えることになる。遺言の2行目の「さらけ出して生きていくこと」が、これらの一連の行動だとすると、自分の思いと実際の成果の間に、大きな隔たりが生じていることが伺える。

d) うわばき隠し、エイプリルフールのメールについての考察

Aは、4月1日に、親しい生徒数名に、死を想起させるようなメールを送信している。

- ・エイプリルフールの冗談と捉えられるとわかっていて、どうしてこの日なのか？とある生徒は思っていた。それも含めてAらしい行動だと捉える生徒もいた。

3月10日、Aは、ある生徒のうわばきを11日に隠すことを、Aの親しい生徒に対して、メールで知らせ予告している。

- ・そこには相手生徒への「俺はあいつが嫌い」という言葉が示しているような気持ちから

実行することが記されていた。

- ・それと共に、うわばきの持ち主の生徒が行ったある生徒への許し難い嫌がらせに対して、Aが怒っての行為だということも、上記とは別のメールからわかっている。
- ・その相手は、自らの遺書に記名した相手とは違う生徒だった。
- ・翌日11日、Aは実行した。うわばきは、隠されるだけではなく、裂かれていた。
- ・Aは自ら靴を裂いて隠した生徒からも、嫌がらせを受けたことがあった。Aの友達への愚痴の中にも出てきていた生徒である。
- ・「ちゃんと注意しなきゃ」という言葉にあるような気持ちと、なかなか注意しきれない自分がある。しかも、「いじられキャラ」は真面目に注意するキャラとは明らかに違うという周囲の固定されつつある見方もある。そういう中で、これも自分として肯定できる行いではなく、自己矛盾につながるような行動だったのではないかと推察される。
- ・人が見ていないところで相手のうわばきや教科書を隠したり裂いたりしている自分。でもそうしないと収まらない気持ちをもっている自分。その自分を完全に肯定できない自分。ここでもやはり複雑な「自己」が葛藤し合いながら、激しい内面の動揺を提示していると推察される。
- ・そして、小学校時代から時折、感情が激昂すると、カッターやはさみが絡んでくる事例が頭をかすめる。その反面、うわばきを裂いた時は、突発的な行動というより、むしろ決心して、こだわりをもって実行しているような行動傾向を示している。この両者も対比的に捉えることもできそうだが、自分を見失っているという点では根本でつながっていると捉えることもできるかもしれない。
- ・「さらけ出せない自分」に対するもどかしさや激しい矛盾が、うわばきの件のような行動をもたらしているのだろうか？自分が気に留め、自分を重ねたであろう音楽の歌詞を手書きで視写していた面と共に、他者には容易に開示しない、Aの孤独な内面の闇を示唆している。
- ・Aの内面は、「求められている自分」、「さらけ出す自分」、「目標とする自分」、そして、「さらけ出せない自分」等がお互いに複雑にぶつかり絡み合ったまま、クラス換えと新しい一年の始まりを迎えたことが伺える。

⑩3年での教科書の件と体育祭前後の内面、自死の決意

a) 教科書の件と体育祭前後の内面についての考察

体育祭前の5月8日か9日の部活練習後に、AはEの教科書や歌集等を4冊切り裂いている。

- ・10日から始まる体育祭練習によって、体育祭後18日にならないと、教科書が切られたことは認知されることがなかった。
- ・Aは、3月のうわばきの件とは違い、教科書を切る件に関しては、事前に誰にも告白していない。Aが初めて教科書の件を他言したのは、体育祭が終了した当日の夜だった。この際にAは、教科書の件がわかることを「楽しみだ」と話している。
- ・この言葉の背景には、教科書の件が周囲にわかることで、Eがやってきた行為への「告発」にも似た意図をもって教科書を切ったことが推察できる。
- ・教科書を切り裂いた後の、体育祭練習期間で、Aは応援団長としてのEに不満を強くも

っていたことが認められている。しかし、その反面、Eの団長としての苦勞や練習中の涙を認めるような発言も認められている。このあたりの気持ちの両極端な揺れ動きも、Aの行動や感情面での特性だと考えられるかもしれない。

- ・ 体育祭前日にEが、体調不良で早退すると、クラス全員でメッセージを届けるということになった。以下はAがEに送ったメッセージの引用である。

「体育祭お疲れ!結構つかれたよな。Eとは対立もしたし、文句も言ったりしたけど、心の中では、いつも尊敬してたぜ!本当にありがとな!この想いはずっとわすれらんねえよ・・・!この涙・汗・団結、ずっと俺の宝物です!Eはまさに『緑の下の力持ち』だな。この先、対立とかしちまうかもしれないが、今回の体育祭をきっかけに仲良くやっていこうぜ!あと、本当にありがとう」。

- ・ この手紙の内容と相反するように、体育祭当日にとった3学年の集合写真では、顔を後ろに向けて、写真にわざと写らないようにしたかのようなAの姿が見られ、「気になった」と話す教諭がいた。写真の中で、他にこのような行動をとった生徒はA以外にはいなかった。
 - ・ これらのことから考えると、体育祭練習期間でのAのEに対する思いの揺れ動きを、すでに教科書を切り裂いていたことを曖昧にするためにとった行動や言動と考えることもできるだろうし、相手への好き嫌いは強かったが、そこに関係なく、いいものはいいと認められるAの特有の反応だとも推察できる。何れにせよ、ここでAの内面に、葛藤や矛盾が複雑に生じていることは確かではないだろうか。
- b) 教科書を切り裂いたこと、周囲の反応とAの内面の自己矛盾についての考察
- 教科書を切ったのがAだという噂は、18日の体育祭代休明けから広まった。
- ・ 噂が本当か否か本人に問いつつ、確かめようとする生徒もいた。
 - ・ Aは親しい友だちには本当のことを話すが、そうでない相手には否定していた。
 - ・ 中には、「面と向かってEにはっきり言えばいい」と助言した生徒もいた。それに対してAは、その時には応答せず、遺言の中で、「言ってたことは正しいと思う。けど、俺にはそんな正直なことはできなかった。本当にゴメンな」と綴って葛藤していた内面を吐露している。
 - ・ Aが21日に担任教諭に告白するまでの数日間、この教科書の件に関する「風評」「評価」にもっとも敏感だったのは他ならぬAだったはずである。そして、24日にAの保護者が教科書の件を知らされるまで、Aは遺書に記名した4人の生徒の名前を明かしていなかった。
 - ・ このことから、なおもAは自力で何とかしようとしていたことが伺える。
 - ・ 応援賞を受賞した時の喜びとEへの嫉妬にも似た憎しみという相反する感情の同居は、体育祭当日夜の「18日が楽しみだ」という言葉に、さらなる勢いと拍車をかけたことが想像できる。
 - ・ 実は、このような方法での「抵抗」そのものも、Aにとっては「目標とする自分」の姿には遠く及ばないものだったと言えるのではないか。ここでも自己矛盾が大きく生まれていると推察できる。

- ・しかし、この矛盾を止め、押し戻すには、Aの内面の自尊感情は大きく低下していたと思われる。そして、それは、3月のうわばきの件からすでに同様の状態だったにもかかわらず、体育祭後の周囲の反応によって、完全にうちのめされたと考えられるかもしれない。
- ・その反応というのは、Aのやった行為に対して「ひどい」という反応だった。どうして、体育祭で頑張った団長にひどいことをするのだという反応だった。応援賞の立役者だったEの教科書を切るなんてひどすぎるという声だった。
- ・旧2年1組の生徒を中心に、Aが行った行為を静かに支持する生徒もいた。中には、「怒られないのなら自分もやっていた」と話す生徒がいた。
- ・これらの賛否の反応は、Aの予期したこととはかなり違っていたのではないだろうか？もっとEの普段の行いがクローズアップされ、だからこんな酷いことをされるんだという風評が起こり、体育祭で頑張ったからといって、Aに相談したある生徒がこぼしていたような、人の人権を萎えさせるような行為は消えないのだ、という声が起こることを期待しての「告発」だったはずである。
- ・しかし、現実はそのようではなかった。残ったのは、影でこそこそ人のものを傷つける愚かで危険な行為だという自己否定的な感情と、不本意な方法でしか抵抗してこれなかった自分への自尊感情の低下だったのではないだろうか。
- ・その反面、多くの生徒が笑って頷き、同調反応を無意識に出すことで自分の身を防衛していた中で、Aにできる精一杯の抵抗だという見方も考えられる。

c) 修学旅行前の詩の授業に投影される内面

国語の俳句の授業で、教科担任の教諭は、感受性の強いAの反応を印象深く見ている。

◇俳句の授業の感想

- ・夏目漱石の俳句“すみれほどな 小さき人に 生まれたし”を読んで、「挫折を味わって大きく成長するんだ。自分も開花すべき時・・・」という感想を修学旅行前の授業で書いている。
- ・やはり同時期の授業で、教材の“じゃんけんに 負けて ホテルに 生まれたの”(池田澄子)という一句を読んで、今の自分自身を一番表現していると感じていた。やはり、修学旅行前だった。
- ・自死を決意する前後での、これらの作品との向き合い方にも、葛藤するAの内面の状態が投影されていると推察される。

d) 自己破綻と自死の決意

- ・11-3の事例からも、Aが自死を決意する過程における葛藤や内面の動揺の振幅がわかる。そして、激しい振幅の果てに、揺れ動く内面のふりこそのものが引きちぎれて破綻してしまったと考えられないだろうか。人のうわばきや教科書を傷つけてさえも何も変えられないという思いに到ったのではないだろうか？
- ・そんな内面の揺れ動きが推察される中で、Aが考えたのは、死という選択だった。
- ・しかし、その選択した「告発」の方法に向かって、Aは、一種の使命感とその自己実現への行動傾向を示しているように推察される。

⑫修学旅行と最後のメール

a) 決意してからの行動の特性

修学旅行での様子、言動から垣間見える内面

- ・ 11までの経緯を辿ると、自らの死を決意したのは、18日以降、体育祭の代休明けの激しい葛藤の振幅と対峙した週を経た25日、26日あたりまでの間だと推察される。
- ・ 決意してからのAは、自らの死を遂行するために必要な材料の注文、配送される時間の選定、残される人たちを励ますメッセージの数々の作成等について、誰にも知られず黙々と推進している。
- ・ 並行して、修学旅行を最後の思い出として、思い切り“はっちゃけている姿”も提示している。
- ・ 同時に、Fのことを案じる言動を見学地の寺院で、友だちにこぼすAの姿もあった。自らの死を決意していたのにもかかわらず、決意する前の行動とほとんど変わっていない。
- ・ このことは、自らの死がやはり「目標達成」や「自己実現」のために選択した方法であり、そのことがAの中に強く生きていることを物語っていると推察する。自死を決意してからの行動には、絶望や諦念と同時に、それらとはまったく相反する希望や使命感といった感情を同時に感じることもできるのではないか。
- ・ 6月6日の死の前日、修学旅行からの帰途の列車では、滞在中の元気さとは対照的な、静かに落ち込みながら座席に座るAの姿が見られている。

b) 最後のメール なぜ励ませるのか？

Aが遺書や遺言、そして7日に送信したメールの数々には友だちや家族を励ます言葉が並んでいる。自らの死を選んだ人がなぜ他者を励ませるのか？

- ・ そこには、「告発」に向けての期待や自己実現の思いと共に、自分の死という選択によって達成したかったことを、残す人たちに託しているような思いが推察できる。
- ・ 遺言には、友だちのいいところを褒めながら、強く自分を見失わないで生きていくことや、人を助けて生きていってほしいという願いが25人の生徒に向けられて対話するように書かれている。ここには「ヘタレ」「俺なんて」と自らを揶揄し続けた自尊感情の低いAが、残す人たちに送った最後で精一杯の「委託」ではなかったのかと推察する。
- ・ そして、それは、今までの「いじられキャラ」として、本気さを曖昧にしていたAとは違う、明確な立ち位置からの言葉だったように見受けられる。死という選択をもってして、Aは、結果的に人の助けになる人を励ませる「目標の自分」に大きく近づくことになったと見ることもできるかもしれない。

⑬Aの内面の動きや葛藤についての考察・まとめ

ここでは、Aの内面の動きや葛藤、その激しい振幅に関するこれまでの経緯を整理して、再び辿ることにする。

a) 小学校の頃から、決して器用ではないが、人の役に立ちたいと思うところがあった。

- ・ しかし、行動に移す際に、真面目な顔をして、一件不思議な行動をするかと思えば、真面目なことを言う等、どこまでが本気なのか否かという印象を少なからず周囲に与えてきた。
- ・ 正義感が強いという評価の反面、単に目立つために奇をてらった不思議な行動をしてい

たとえている生徒もいた。

- b) 決して器用ではなかったが、小学校時代から、運営委員会、実行委員会、応援団等、人の役に立つための具体的な挑戦を自分なりに努力していた。また、このことを教員や友だちからも評価されてきた。
- c) 基本的には、あまり目立たないという印象をAはもたれていたが、ここぞという時に、他者とは違った行動や動き、言動等を見せ、それが独特の考えや動きの個性と見られ、評価の賛否を分けていた。
- ・内面の真意が、なかなか他者に伝えられない不本意さを自身も感じながら、打破しようと願う内面の葛藤は、小学校時代から始まっていた。
- d) Aは小学校時代から、普段は落ち着いていて目立たなかったが、学校や塾で思い通りにいかないことに直面すると、感情が激しく高揚して、相手に構わず反抗することがあった。
- ・その反面、自分を認めてくれる人、アドバイスをしてくれた友達や先生に対して、きちんと礼の言葉を伝える等、大人びた律儀さを表現している姿も認められている。
- e) 友達と身体を動かして遊ぶことが多く、小学校時代は、必要なとき以外に、教室にいたことはなかったような児童だった。
- ・また、父親のソフトボールの試合に帯同し、ベンチから元気に応援した。一塁への全力疾走を怠る大人に対しては、きちんと意見を言い、一喝するような面もあった。
- f) 中学校1年生では、学級があまり落ち着かない状況の中で、小学校時代にも見られた激しい感情の高揚がしばしば見られ、母親も度々、学校に来校している。
- ・授業中に執拗にちょっかいを出してくる生徒に腹を立て、傍にいる生徒から手渡されたカッターで、一度だけ、相手生徒の手の指を傷つける出来事があった。
 - ・感情の高揚に伴い、納得できない時は、相手が教師でも、激しい感情をぶつけるような場面も見られた。
 - ・1年生では駅伝大会に並々ならぬ意欲を示し、自らの手応えを感じながら活動していた。また、普段学校の話をしないうAが、このことを珍しく家族に詳しく話している。このことから、「ヘタレ」な自分を打破し、人から認められたいと願うAの内面が伺える。
- g) 中学2年生になると、駅伝への挑戦を抑えてまでも生徒会に立候補している。
- ・立候補の時点までに、「いじられキャラ」としてのAのイメージは定着していたので、周囲には立候補の意外性を感じる生徒が少なくなかった。立候補の時点で、「いじられキャラ」の定着と、「目標にする自分」との間での軋轢、矛盾はかなり大きなものになっていたと考えられる。その打破のひとつの挑戦、試みとしての生徒会への立候補は、Aの自己実現や自尊感情の維持、高揚のために大きな意味があったと推察される。
- h) 生徒会への立候補は「目標とする自分」の実現のための途だったが、なかなか思っていることと行動や言動が伴わないことも多かった。
- ・「いじられキャラ」としての「求められる自分」と、生徒会役員としての「求められる自分」と、「生徒会役員を通して目標の自分を実現しようとする自分」が、微妙にずれ始める。軋轢の重層構造を伴いながら、ますます自己矛盾を生んでいったことが推察される。
- i) Fへのいじめを止められない自分への苛立ちと、自分が遺書に記名した生徒へ笑いな

がらかかわっていく行為は矛盾するものではなく、Aが表現できる「いじられキャラ」としての、いじめへの精一杯の抵抗だったと推察する。

- ・ここでも「求められる自分」と「目標にする自分」と「実際の自分」の間に大きな葛藤・矛盾が生まれる。
- j) 2年生の末に、初めてFのことで、泣きながら母親に相談したAは、ここでも遺書に記名した4生徒の名前を隠している。
- ・自分が何とかしなくてはという気持ちをこの時点では依然としてもっていたことが伺える。「俺が頑張らなきゃ」、「仲良くしなきゃ」という言動とも重なるのがこの時期である。
 - ・Aは結果的に「いじられキャラ」が定着していく過程で、周囲からふざけているのか本気なのか判断が難しいと見られながら、学級の男子生徒の大部分が笑って頷き、嫌がらせをされても反応しないようにして自己防衛した動きとは異なる反応や行動で、Aとしての独自の抵抗を示し続けたと推測される。
 - ・また、それと並行して、遺書に記名していない生徒1人のうわばきを裂いて、隠している。「いじられキャラ」とは別の、激しい怒りが、それでいて計画的に発揮されている。
 - ・「求められる自分」と「目標とする自分」、「目標から離れていく自分」の間の自己矛盾は、さらに加速しながら破綻に近い状態まで高まっていくのが、2年生の末にかけての時期だったと推察できる。
- k) 3年でクラス替えがあり、遺書に記名したC・Eと一緒にいるが、かかわり方が大きく変わった。
- ・「いじられキャラ」を発揮するのは、話題が合う身近な友達に変わっていく。しかもアニメ等の話題が共通する友だちの存在も後押しして、周囲には自分から素直に笑う笑顔が目立っていたという印象を強く与えている。
 - ・遺書に記名した生徒から声をかけられると、とても嫌そうな顔をするのが目立ってきた。2年の時のようにとりあえず接点をもつ中で展開していく関係性から、明らかに変わってきている。
 - ・2年の学年末で、「俺が頑張らなきゃ」、「俺が仲良くしなきゃ」と言っていたAのこのようなかかわり方の変化にも、Aの内面の葛藤や自己矛盾が推察される。そのような煮え切らない状態で、Aが最終学年のステップを踏み出したことは推察するのに難くない。
 - ・4月1日のメールも、そういった経緯の中での一種のSOSとしての側面をもっていた可能性があったとも推察する。
 - ・話題が合う友だちと楽しく話す場面が増えたこの時期に、Aが友だちとほとんど共有しなかったのは、学習机の引き出しに残っていたアニメの歌詞の視写に見られるような、命や正義、相手意識にかかわるような言葉に対する、独特な感じ方や考え方だった。
 - ・これらに対して表面的には「Aらしい」と話す生徒はいる。しかし、歌詞や詩の内容について掘り下げて、Aが他の友だちと話し合うことはほとんどなかった。ある生徒は、Aが音楽の曲想は二の次で、歌詞に注目する傾向があったことを指摘している。
 - ・また、『鋼の錬金術』をはじめとする、アニメや漫画の主人公の台詞等の影響を受けていたという指摘もあり、それが「困っている人を助ける、人の役に立ち優しくする」という「目標」を後押しするような支えになっていたとも推察される。

- ・さらに、Aが2年生の12月につくったクリスマスの兄弟の物語では、お互いを思いやり、我慢しながら、本当の気持ちを悟られないように暮らす兄弟の姿が描かれている。そこでは、大切なものを得るためには、別の大切なこと（命）を削る兄の生きる姿も描かれている。物語中の「当たり前」の日常がどんなに心温まる事か、それを感じて下さい」や兄が弟に伝える、「信じて待っていれば必ず来るから」といった言葉にもAの内面のこだわりが映し出されていると推察される。

l) 3年になり、「自己紹介カード」に書かれた内容でもあったが、Aは体育祭への強い意欲をもっていた。

- ・体育祭では、Eを応援団長として迎え、最初は抵抗を見せた。しかし、Eが団長として、苦労しながら頑張る姿には、Aは認める言動や行動を示している。
- ・ただし、それらには、教科書のことを切り裂いたことを曖昧にするための行動と見られる面や、相手の好き嫌いははっきりしているが、それでもいい面は認めるというAの行動特性だと考えられる面等、推察も揺れ動く側面をもっている。
- ・はっきりしているのは、体育祭練習前に、生徒Eの教科書を切り裂いた自分の行動との葛藤、応援賞を受賞したことへの喜びと、団長の功績に対して素直に喜べない今までの過去の経緯との葛藤が複雑に絡んで、ここでも内面の動揺について大きな振幅が認められるという点である。
- ・そして、体育祭後のメール送信と、教科書に関する友だちへの告白へとつながる。

m) 教科書を切り裂いた生徒が、Aであるという噂と、後日自身が認めたことから、Aの行為への「賛否」が、3組を中心に静かに横溢する。

- ・これを最も敏感に捉えたのは他ならぬAである。自分の行為によって、今までのいじめを中心とした「暴力」への、告発にも似た抵抗（教科書の件）をしたAは、その反応や、応答を他者に委ねたのだと推察する。しかし、その応えは、自らが思うようには決してならなかったとも推察する。
- ・Aにとって、応援賞はうれしいと思う反面、体育祭の活躍で過去の罪が清算されるのかというような不満があったのかもしれないと推察している。
- ・人にはいいところはあることも認めながら、行事の活躍で過去の罪は消えていくのかという問いかけを内面に抱えていたと推察される。
- ・特にAは、自分のことよりも、Fのことや、Aに対して「俺、クラスで人権ないから」と言って悩みをつぶやいた生徒の気持ち等に、未だ向き合っていない相手への憤りを、内面に抱えていたと推察される。
- ・このように、体育祭後の翌週を通して、Aの内面ではたくさんの自問があふれたことが推察される。
- ・ここで、これまでの葛藤や自己矛盾の経緯の積み重ねも総動員され、Aの内面は自己破壊の状態まで追い詰められていると推察される。
- ・この週のAの塾での様子で、机にうつ伏せている姿が頻繁に見られている。それは、体育祭前の週とはあまりにも対照的な姿だった。
- ・これまでのことを総合的に考えると、自死の決断は恐らくこの週から次週前半にかけて行われたと推察する。

n) 自死の決断が行われてからのAの行動は、ある種の冷静さを保ちながら、我を忘れる

ような集中力を伴い、それでいて確実に漏れなく進められている。

- ・そして、修学旅行では、思い切りハイテンションではしゃぐ姿が目立っている。
- ・しかし、その中でもFを案じる言動も認められている。死を決断してなおもいじめられる友達を案じていたAの側面がここでも浮き彫りにされる。
- ・しかし、それでも死を選択したのは、「目標」の達成のためには、Aが傾倒し、引用していたアニメ『鋼の錬金術師』の歌詞や台詞、遺書に引用された土佐藩士の発想等にも似た、A特有の死への思い込みが、行動を支えているようにも推察される。

100人の生徒や教師からの調査、Aが遺した手がかりや言葉等から、どんなに根拠を集めても、最後まで、多くの疑問符は消えることはなかった。

はっきりとしたAの内面の答えは、未だ闇の中のままである。

なぜなら、私たちがどんなに考察を重ねても、A本人とだけは直接対話することはできないからである。そして、そのことを受けとめながら、今後もAの生と死にかかわった、活かされて生きるすべての人が、この事実を風化させることなく、自分の問題として考え続けていくことが大切である。

4 周囲の生徒たちの行為について

(1) 遺書に名前のあった4人の行為について

①Aに対する具体的な内容

延べ77人（他校生も含む）の生徒からの聞き取りをもとに、生徒が実際に自分の目で「見た」行為と、その生徒がその行為をどのようにとらえ感じたかをもとに、Aに対して行われた行為を調査した。そのときの行為者の思い（一緒に遊んでいるつもりだった）と見ていた者の思い（やり過ぎ、ひど過ぎることをしている）との違いや、行為の頻度の認識の違い、またAの反応のとらえ方（Aの笑いをどう感じたか）の違い等に、B・C・D・Eと周囲の生徒とに差異はあるものの、行った行為そのものについては、本人たちが自ら述べている内容と大きな差異があるものではなく、それぞれの行為は実際にあった事実として調査委員会では判断した。

以下に述べるそれぞれの行為は、常にB・C・D・Eが4人で行ったわけではない。それぞれの関わり方や行った行為や回数・程度にも差があるが、ほとんどの場合、2人、3人、4人の複数でAに対している。また、多くの生徒は、2年時の4人を一つの仲間グループとしてとらえ、彼らをクラス内での逆らいがたい勢力として認識し、クラス内での力関係を実感している。

生徒たちの次のような言葉から、そのことがわかる。「4人はいつも廊下に集合している。水道のところに座っている」「2年のクラスは、スタートから4人がいばる雰囲気」「4人揃うと、オールスターキャストという感じ。威圧感がある。」「何かしら4人は一緒だった。周りに何人かいる時もあった。それで何かをするわけではなく、水道に屯したりしている。」「4人は大きくて威圧感がある。傍に近寄りにくい。ひとりひとは自覚はないかもしれないが、4人がかたまっている時の雰囲気は近寄りにくい空気があった。」「4人はかたまっていることが多い。」「本人たちは気づいていないが、4人の誰かが、2人でも3人でもいたら、怖くて注意できない。たとえ1人でもつながっていると思うと、後で

やられるような怖さがあった。それは一種の『力』だった。」

これらのことから、以下の行為は、グループ総体として A に行った行為としてとらえ、それらを事実と判断した。

○具体的行為

- ・背中を叩く。
- ・頭をはたく。
- ・肩にパンチをする。
- ・プロレスごっこ（戦いごっこ）のような形で接触をする中で、壁や床に押しつける。馬乗りになる。頬をたたく。蹴る。
- ・ズボン下ろし
- ・パンツ下ろし
- ・ある女子に対し、その女子が嫌がる言葉を言ってこいと命じる。

上記の行為は、A が一方的にやられるのではなく、「プロレスごっこ」のような「戦いごっこ」（4人の中の一人の言葉による）という形をとる中で、A もやり返していたという事実がある。しかし、その程度については、多くの生徒が、対等にやり返しているような状況ではなかったと話している。また、A が4人の中のどれかとやりあうことがほとんどで、4人がお互いにやり合うことはほとんどなかった。

ズボン下ろしは、B・C・D・E だけではなく、男子の間で一時的に流行っていて、教室の後ろや廊下で、クラスに関係なくやっていたという。女子もやることもあり、女子同士ではスカートめくりをやっていた生徒もいたという。

ズボン下ろしを、A が他の生徒に対しやっていたという事実もあり、A だけが一方的にやられていた状況ではないが、調査した中でパンツまで下ろされていたのは A だけである。後ろから突然パンツまで下げられたり、ズボンを下げられそうになって抵抗する中で床に倒れ、上半身を押しえつけられてパンツまで下げられたりしたのを、いくつかの場面で、何人かの生徒が見ている。一瞬のことではなく数分間、そのままの状態下半身を教室内で出され、お尻を叩かれていたのを見ていた生徒もいた。

このような行為の最中に、A が「笑っていた」「笑顔だった」「苦笑いしていた」と見ている生徒が多くいた。そのうちの半数近くは、「笑っているけれどつらそう」、「表面は笑っているけれど、楽しそうというのとは違う」、「見た目は笑っているけれど心中はわからない」等と話している。

また、「どんな行為でも無理やりやらされている」、「しつこく何かをやらせていた」と見ている生徒も複数いた。A が積極的に B・C・D・E に接触していくことはなく、B・C・D・E の中の誰かが声をかけて、A を呼び出していた。「A、集合」と声をかけることもあった。

このような行為の行われた時期は、2年の後期から3月まで、ほぼ毎日のように休み時間の度にやっていたと複数の生徒が話している。

②Fに対する具体的な内容

F 本人への聞き取りから、具体的な内容がわかった。B・C・D・E からの聞き取りともほぼ一致しているが、頻度については違いがある。地域の野球チームで一緒だった C・D

が、野球チーム内での F の行動に対しての言葉がけをきっかけに、F の外見上のことや話し方等について、B・C・D・E が一方的に F の嫌がる言葉を言ったり、頭をはたいたり、蹴ったりしていた。時期は、5月くらいから3月末まで、ほぼ毎日、休み時間のたびに、また朝学活の始まる前や授業開始前の教員が来るまでの時間に行っていた。ひどくなっていったのは11月くらいからだという。

F は嫌がるような素振りや表情を見せていたものの、強い拒否的な行動に出ることはなかった。具体的に周囲の生徒が聞いた言葉としては、

- ・「うざい」
- ・「きもい」
- ・「オデ」（歯の矯正をしているため、滑舌がよくなくて「オレ」が「オデ」に聞こえるため）
- ・「おやじ」
- ・「おっさん」
- ・「おじいちゃん」
- ・「ガンショウ」（顔面障害の略、なぜ使ったのかは不明）
- ・「K先生の息子」
- ・「ハゲ」
- ・「めがね」
- ・「F ○○やってんだぜえ」
- ・「バカだぜえ」
- ・「F きもくねえ」

などで、ほとんどの言葉を F 自身も認知している。

B・C・D・E はこの他に、授業中に消しゴムのかすを投げたことや、F の話し方をまねしたことを話している。

このような様子を見ていた生徒は、「見ていてかわいそうだった。」「ひきつった笑いでちょっとつらそうだった。」「態度でやめろよという拒否を示していた」「嫌だったと思う。」等の感想を述べてる。

F 自身は「11月くらいから、ひどくなってきた。嫌だと思った相手は、B・C・D・E の4人。他はいない。この4人の中で、E からはあまりやられていないが、一緒のグループの中にいて周りで笑っていた。ずっとがまんしていた。」と言っている。

F によると、これらの行為に対し、A は6, 7回止めてくれたことがあるという。「そういうことやめろ」と、止めようとしてくれ、すると、4人はやめなくて、矛先を A に向けて A をたたいたりけったり、自分にやったのと同じくらい、何か言葉を言いながらやっていたが、その言葉は、覚えていないということである。A は「F、大丈夫か」と時々声をかけてくれたという。

F への行為を A が止めているのを見たある生徒は、「2～3回止めているのを見た。止めるといきなり A ビンタされたり、肩貸せよと言って、肩パンチをされたりしていた」と話しおり、A に対してそのような行為があったということは F も覚えていた。

これらの行為は2年生のときのことで、3年生になってからはグループによるこのような行為はなくなり、たまに、D が通りすがりに嫌なことを言って通り過ぎて行くことがあったという。

(2) 4人以外の生徒のAに対する行為について

Aに対して「いじり」行為を行っていたのは4人だけではない。「いじられキャラ」としての2年時当初の段階では、周囲の多くの生徒がAに対していろいろな要求をして、Aはそれに答えていた。後期になってからはB・C・D・Eの行為が際立ってきたためか、周囲の行為は見えにくくなっていったのかも知れないが、他の具体的な名前はあがっていない。ただ、他のクラスの生徒1人が、Aに対し相当の「いじり」行為を行っているのを多くの生徒が見ている。

その内容は、B・C・D・Eの行為と同様のものもあり、本人もエスカレートしていったことについての自覚をある程度持っていたが、あくまでも「いじり」をしているという認識だった。しかし、Aとはクラスが違っていたことで行為の頻度には大きな差があり、またFへの行為に加わっていなかったという点で、B・C・D・Eの行為とは異なっていたと見ている生徒も複数いた。さらに、その生徒がAと小学校が一緒に、小学校時よりAとの関わりやトラブルが多かったため、逆にAの性格や行為に対する限度も経験的にわかっていて見ている生徒もいた。

しかし、その生徒に対してもAが悪感情をもっていたことは、B・C・D・Eに対するのと同様に、Aが親しかった友人にその生徒についてのグチを語っていることからうかがえる。また、3月にその生徒の上履きがなくなり、その後にカッターで切られた状態で校内で見つかるという事件があり、それをやったのはAだという噂が一部では流れたが、結局は行為者は特定されることはなかった。しかし、今回の調査で、それについてもAの行為であることがわかった。Aがその生徒に対しても相当の反感を持っていたこと、またその生徒が、他のある生徒へ行った嫌がらせを許し難いと感じて実行した行為であることがわかった。Aのその行為と、3年時のEの教科書への行為との共通点もあるが、B・C・D・Eとは前述のような違いがあるためか、その生徒の名前が遺書に書かれなかったのではと推察する。

3年生になると、4人からの2年時のような行為はほとんどなくなっていたが、A自身が新たなクラスの友人たちと、かなり頻繁に「いじり」「いじられ」を相互に行っていたという事実もある。

内容は、

- ①クラス内で誰かをたたいて逃げて追いかけてっこをする
- ②誰かの持ち物を取って逃げて追いかけてっこをする
- ③その中でつかみ合いやもみ合いになったり、取られた物を取り返そうとじゃれ合う中で、ジャージやパンツを下ろそうとしたりする
- ④ふざけ合いながらシャツを脱がす
- ⑤背中を叩き合う。

等の行為である。

また、その他に他クラスの生徒が関わっての行為として

- ①Aの手首と足首をもって振り回し、最後に投げる
- ②Aを他クラスの中に無理矢理入れて、そのクラスの生徒と戦わせる

その延長でAが追いかけられ、黒板消しで頭をはたかれて倒され、机に頭をぶつけると

いうこともあった。このような行為を見ていた生徒の中には、「Aは、嫌がっていてやり過ぎの感じがした」と語った生徒もいる。

そのような行為について、Aと親しかった生徒たちは、「仲間内でのお互いに気心が知れ、限度をわかり合っている中で楽しんでいること」と語り、同様に感じていた周囲の生徒も多いが、中には「いじめのように見えた」と感じていたり、3年生らしくない幼い行為として冷ややかに見ていた生徒もいた。

そのようなA自身の行為とB・C・D・Eの行為の違いについては、Aと親しかったクラスの生徒や野球部の生徒たちがそれぞれに語っているが、25人の友人に宛てた「遺言」の中でA自身が、Aと相互に「いじり」「いじられ」をやっていた友人たちへの感謝の言葉を述べており、彼らとの関係や行為が、2年時のB・C・D・Eとの関係や行為とは異なっていたということがわかる。また、2年時にAと同クラスで、3年生では違うクラスになった友人2人は「3年になってAは、クラスに仲のいい友達が増え、2年に比べて楽しそうだった。自分からちょっかいを出したり常に笑顔だった。周りいる友達が増えた。2年の時も周りにいたが、Aをからかう人たちが多かった。そこが大きく違う』『度合い』が違う。Aが楽しくて笑っている。4人のは、Aが命令を聞かされて上から目線で命じられてやっていた。そこが違う」と述べている

しかし、調査委員会としては、その違いも、上記のような行為の中には、紙一重の違いであると思われるものもあり、そのような行為が「いじり」「いじられ」として、3年時まで続いてきた状況は、前述のようにたいへん問題であると考えている。

(3) A・Fに対する行為の「いじめ」という視点からの考察

文部科学省は昭和60年にいじめの定義を定め、その後、いじめの深刻化を受けて平成18年には新基準を設けている。(後述)

本調査委員会でも、基本的にはこの定義に基づき、それぞれの考えを出し合い、「自分がされて嫌だと思ふような行為」はいじめであるということ、また、行為を行う側が複数であったり、集団化した際にはパワーバランスが大きく崩れるということも重視した。

さらに、行為を受けている側の反応のとらえ方として、強い訴えや拒絶の姿勢を示していなくても、弱さを示したくなかったり、家族に心配をかけたくなかったり、周囲の目を気にしたりして、無反応を装ったり、いじめを否定したりする事例も多いということも重視した。

Fに対する行為は、本人が語っていることにより、長期間に渡って継続的に行われた、物理的・心理的攻撃であったことは明白であり、いじめと認定するのが妥当であると判断する。

Aに対する行為については、A自身が亡くなっており、Aの心中は推察するしかない。しかし、B・C・D・Eの行為に応じていることで、Aが心中密かにこうありたいと願っていた自分のありよう、つまり遺書の言葉を用いれば「困っている人を助ける、人の役に立ち優しくする」自分、そんな自分像とは異なった自分像を自他の中に作っていつてしまっていることに、違和感、拒否感、また自己否定の気持ちを惹起した可能性が考えられる。

自分の理想と相反する像とは、「優しく人の役に立つ自分」ではなく、自分の怒りや言動で人の心を傷つけたり、人に迷惑をかけてしまったりするような自分像である。

そのように自分を追い立てた怒りの感情を引き起こしたのは、2年時のB・C・D・Eの行為によるところが大であった。そのような感情は、4人の中の誰というのではなく集団としての4人グループにより、長期間にわたって、一日に何度も「いじめられキャラ」として自分の意に反する行動を強いられたり、痛みを味わわされたり、また自分が信頼し敬意を持っている友人がいじめられたりするのを目にしたたり、さらに、友人への行為を止めようとした自分に矛先が向けられたりしたことで、Aの内部にじわじわと湧き起こってきた感情であったろう。

Aを追い立てた様々な行為の中で、そのような思いが、自分自身が望む自己と現実の自分とのギャップを、折に触れて実感させることになり、Aの内部では葛藤が生じていたであろうと考えられる。理想とは相反する行為を行う状況に追い込まれていくのに作用した大きな力は、周囲からの「いじめ」行為であり、それがエスカレートしていったことだったと考えられる。

そのようなAの内的状況については前項において詳しく述べてきたが、ここで、いじめの定義に基づき、Aへの行為及びそれを取り巻く状態を考察する。

文部科学省が従来定義していた「いじめ」とは

- ①自分より弱い者に対して一方的に、
- ②身体的・心理的な攻撃を継続的に加え、
- ③相手が深刻な苦痛を感じているもの。

であり、「個々の行為がいじめにあたるか否かの判断を表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うこと」としている。

前述のように平成18年度からは、新基準により、

- ①について、強い・弱い力関係や「一方的に」ということは問わないこと
- ②について、行為の継続性は問わないこと
- ③について、苦痛は当該児童生徒の立場で考えること

が規定され、次のように定義された。

いじめとは

- ①当該児童生徒が、一定の人間関係にある者から、
- ②心理的・物理的な攻撃を受けたことにより、
- ③精神的な苦痛を感じているもの

なお、「個々の行為がいじめに当たるか否かの判断は、表面的・形式的に行うことなく、いじめられた児童生徒の立場に立って行うものとする」となっている。

これらのことから、Aに対する行為について判断する。

①力関係と「一方的かどうか」ということについて

Aは自分への行為に対し、4人にやり返すこともできるような関係であったことから、「一方的に」やられるのではなく同等の位置にあったと考えることも可能かも知れないが、A

が4人から命令的に行動させられている立場にあるのに反して、B・C・D・Eに対してAは命令を発することはできていないこと、また、パンツ下ろしに関しては一方的にAがやられるのみで、AがB・C・D・Eにやったという事実がないこと、さらに、本調査が、4人の行為を総体としてとらえて考察していることから、4人とAとの関係は、4人がAよりも力関係では上位にあったと判断する。

②受けた攻撃の状況や継続的かどうかということについて

Aが受けた物理的な行為に対し、Aが同様の行為をやり返していることも多く、「攻撃」と判断するには躊躇したとしても、心理的な面からは、前述のように、強いられた行為によって自己の在り方を揺さぶられていること、また、思春期の男子が、女子生徒もいる場所でパンツを下ろされることで、恥ずかしさや、他の力に屈しているという屈辱感が生じているであろうことから、結果として心理的攻撃を受けていたと判断する。

また、継続性という点から見たとき、そのような行為が一度ではなく何度か繰り返されており、継続性という点にも触れると判断する。

③Aが感じていた苦痛について

Fが「いじめ」と感じている4人の行為を止めようとしているAが、複数回同様の行為を受けていることは、AもF同様の苦痛を感じているととることができる。

また、Fに対する行為からAの内部に生じた心情、またA自身に対する行為から生じたA内部の自己否定感は、今まで述べたようにAの内面に悩み・葛藤が生じていく一つの要因となっており、その行為にAの内面での被害性を認めることができ、精神的苦痛を伴っていたと判断する。

以上のことから、B・C・D・Eを含め、A周辺の一部生徒によるAに対する心理的圧迫につながったであろう行為は、本人たちが「いじり」あるいは「お互いの遊び」と思っていたとしても、

- ①力の優位性
- ②攻撃性・反復性
- ③Aの内面への被害性

の3点から考えて、文部科学省の定義と照らし合わせて、「いじめ」として認定すると判断した。

また、本調査委員会は、いじめを行為としてではなく、状態としてとらえる考え方に立って、本事案の重要な背景である学年・学校全体とその周囲の状況について考察した。

本校全体の状態としては、

- ①「いじり」「いじられキャラ」という言葉によって、特定の生徒に対する他の者にはやらない行為を行うことを、集団として容認していた状態
- ②その「いじり」行為を、周囲ではやしたてたり笑って見ていたりしていた状態
- ③その状態を傍観的に見たり、あるいは見ようとしなかったような状態
- ④その状態や行為に問題点を感じながらも、その解決に向けての行動を起こさなかった、あるいは起こせなかった状態

⑤その状態や行為に気づけなかった教員をはじめ大人集団の状態

学校内がそのような状態であったととらえ、その状態をいじめとして認定すると判断する。

5 学校体制の問題点について

上記「3 本事業発生の背景」の中の「①学年の生徒の全体的状況」で指摘したような、生徒の全体的状況を改善できなかったことは、本事業の背景としてたいへん重要である。明らかになった学校体制の問題点について言及する。

①組織上の問題点

先ず一番の問題であるのは、生徒指導に対して、学校全体が一丸となって取り組もうとする体制が不十分で、職員の意識も希薄だったこと。さまざまな問題行動等が学年任せになっている状況で、学校全体で考えて取り組んでいこうとする姿勢に欠けていた点。

次に、そのような体制を作るうえで中心的役割を果たすはずの、生徒指導部長と生徒指導担当教諭との間での連携が不十分だったため、学校全体で生徒指導のあり方を検討したり、組織的な生徒指導体制を作っていこうとする取組がなされることがなく、生徒の実態に応じた有効な生徒指導体制が作れなかったこと。

また、職員構成・職員配置にも問題があり、この学年の生徒を3年間継続して見ていく教員が、一人もいなかった状況であり、生徒との信頼関係を築くうえでも、また生徒の実態を適切に把握するうえでも大きなマイナス要因になったこと。

さらに、そのような状況に対して疑問を持ち、改善が必要だと感じる教員も相当数いたにもかかわらず、それが個人的な意見にとどまり、組織的な改革につなげようという動きに結びつかず、状況が改善されることがなかったこと。

②生徒指導上の問題点

まず、生徒指導の基本的なスタンスに問題が見られること。特に当該学年においては、問題行動に対し、生徒の内面に寄り添って行動の裏にある様々な思いや状況を理解しようとする生徒指導が進んでいなかったこと。

次に、担任教諭の生徒の言動に対する認識が甘かったこと。学級内の生徒同士の人間関係や力関係はある程度把握していたものの、そのような関係性の中で起こる日々の小さな問題行動を、その場の注意だけで済ませてしまったこと。また学年内の情報交換も不十分だったため、学年全体にあった「いじり」「いじられ」と呼ばれる行為の実態を把握できていなかったこと。

さらに、教員は個々の問題意識の中で、生徒の生徒指導上の課題となる点を、それぞれに感じ取り、とらえてはいたものの、それを学校教育全体を通して解決していくべき課題として、組織的に取り組んでいく体制が不十分であったため、有効な生徒指導体制が作れていなかったこと。

最後に、情報の共有化が図られていなかったこと。学年・学校全体が共通意識を持ってチームとして取り組んでいくためのシステムは作られてはいたが、課題が確実に担当教諭に集約され、管理職にも確実に伝わっていくようには機能していなかったこと。また、重要な情報共有の場として、週に1回の主任会（校長・教頭・教務主任・生担・学年主任・

養護教諭)があつたが、それも生徒指導上の課題に対しては有効に機能していなかつたこと。月に1回の生徒指導部会も、会の目的が曖昧になっており、情報交換と対応のあり方の検討が不十分であつたこと。

③管理職のリーダーとしての問題点

第一に、学校規模を念頭に置いた全体的・計画的な、見通しを持った人事配置・教員配置について、校長の学校経営の見通しが十分でなかつたこと。

次に、教員集団をリードしていくために不可欠な、校長と教頭との緊密な連携が十分ではなく、教員の中で中心的役割を果たす教務主任や生徒指導担当教諭との緊密な連携体制を作れていなかつたこと。また、校長を補佐しつつ教員集団をまとめリードしていくという教頭の役割が、十分に果たされていなかつたということ。

さらに、指導体制が学校全体という視点ではなく、学年単位の取組になっていた状況を、管理職も認識していながら、その状況を打破できなかつたこと。

④保護者・家庭との連携上の問題点

本校は他の学校に比べると、授業参観や学級懇談会が少ないという現状があり、保護者が来校する機会が少なく、教員と保護者とのコミュニケーションが十分ではなかつたこと。

その結果、生徒の学校での様子やできごとを、必要に応じて保護者に確実に伝えていく体制が不十分であつたこと。

また、生徒指導上の問題が発生したとき、その内容を保護者に連絡するかどうかの判断が担任任せになっていた部分があり、学年・生徒指導部、さらに管理職の考えを反映させるような体制を取ってこなかつたこと。

以上、いくつもの問題点が重なつた結果、本校の教員集団は「いじり」「いじられ」のような生徒の行動を改善することなく、そこに隠れてしまった問題行動を明らかにすることができなかつた。また、Aの自死に至るまでに示されたいくつかの情報についての扱いが不十分になり、情報の共有化が図られず、一歩踏み込んだ生徒指導や、保護者との連携ができなかつたことにつながる結果となつた。

管理職はもちろん、教職員一人一人が猛省し、学校全体で改善を図っていくことを求める。

6 生徒のケアに関すること

本事案発生後、当事者・当事者家族をはじめ多くの生徒・保護者が心理的にたいへん不安定な状態に陥つた。6月9日の保護者会に際し、総合教育センター教育相談センター・市教委学校教育部・川崎市 CRT チーム(心の緊急支援チーム)から専門家が来校し、生徒・保護者の心のケアの体制を整え、説明した。

6月10日より教育相談センターのカウンセラー2名が常駐し、生徒のケアを中心に相談活動を行っていった。6月25日までに32名の生徒、7名の保護者がカウンセリングを受けた。また、6月18日から24日までの、担任による定例の教育相談においても、本事案に触れながら生徒の心理状態を聞き取り、必要に応じてカウンセラーにつないでいった。

その後、第3回調査委員会において、生徒のケアがまだまだ必要であることが指摘され、7月5日より3年生全員を対象に、希望者に特別面談を実施することを決定した。延べ65人の生徒に面談を実施し、一人一人の生徒の心の内を聞き取ることでケアにつなげた。面談は、市教委の職員 名が、スクールカウンセラースーパーバイザーからの研修を受け、本事案の経緯・背景と面談の際の留意点について共通認識を持って当たった。面談に先立ち、アンケートによる全員のスクリーニングを実施し、一人一人の生徒の状況をとらえたうえで、面談を実施した。

初めは、A との関係の中で混乱したり、自分を責めたり、他者を責めたり、また体調に変調を感じている生徒も多かったが、時間の経過とともに、夏休み前には、表面上は多くの生徒が落ち着きを取り戻してきた。しかし、夏季休業を控え、一時的に学校生活から離れることに不安を持つ保護者・生徒・地域の方も多く、PTA からの要望により、7月18日に臨時保護者会を開催し、その中で、スクールカウンセラースーパーバイザーからのアドバイスが行われた。

夏季休業明けの生徒の様子は、概ね落ち着いているようだとの報告を学校から受けているが、今後も生徒一人一人の状況を丁寧に見取っていく必要があるだろう。特に、当事者の生徒たちは、当初より非常に厳しい状況におかれる中で、混乱・不安・疑問等、様々な感情が渦巻く中で、相当な精神的ダメージを受けており、そのケアについては、今後学校の重要な課題の一つとして、関係機関との連携を図りながら適切に取り組むことを、調査委員会としても望む。そして、本校の一人一人の生徒が、自分の現実にしかりと向き合いながら、A が亡くなったという事実を受け入れつつ、A の死を無駄にすることなく、自分の歩みを一歩ずつ確実に歩んでいくことを切に望むものである。

7 再発防止に向けて

本報告書では、本事案が発生するに至る背景等について述べてきた。

今後、このような悲しいできごとを二度と繰り返さないよう、学校・家庭・市教委等がそれぞれの立場で近年の取組状況を冷静に振り返り、改善点を明確にしていくことが求められる。

本事案発生から3ヶ月が過ぎようとしており、すでに改善されている部分もあろうが、今後は本報告書をもとに、さらなる取組をしていくことが必要である。それぞれに、何が足りなかったのか、何が必要だったのか、どうすべきだったのかを厳しい目で振り返り、尊い命の大切さ、人と人との関わり方等を、生徒たちにどのように指導していくのか、また周囲の大人たちがどのような姿勢・まなざしで子どもたちを見守っていくのか、真剣に考えていくことを求める。

本調査の過程において、学校側の問題点が多々浮かび上がってきた。調査委員会としても、調査を進めつつ、その点について適宜指摘し、中間報告において、学校体制の不備として厳しく指摘してきた。この間に改善された部分もあろうが、今後も全教職員が一丸となって学校の再生に向けて全力で取り組んでいくことを求める。

特に、本事案の背景の重要な部分として指摘した学年・学校全体の問題点については、生徒・教員・保護者が一体となって現状を見つめ直し、望ましい教育の在り方、集団の在り方、家庭の在り方、親の関わり方等を見出していくことが望まれる。

8 まとめ

本調査委員会は、生徒の尊い命が失われるという、突然のたいへん悲しいできごとに関して、その背景に何があったのかを中心に調査を行ってきた。

人が自らその命を絶つとき、そこには様々な要因が複雑に関係し合っている。今までに述べてきたように、A をめぐる外的・内的な状況を明らかにすることによって、ある程度それを説明することはできたと考えている。そして、外的要因の一つとして、本校に「いじめ」の状態があったことを認定した。

本調査委員会は、A の死に関する法律的な意味での因果関係を調査するものではない。生徒たちや大人たちの証言や、A が残したわずかな心の軌跡もとに、A の周辺で何が起り、A が何を感じ、何を悩み、何を訴えたかったのかをできる限り解明しようと努めてきた。

たいへん不安定で人生の目標が見えにくい今の社会状況の中、思春期のまっただ中にいる中学生は、誰もがそれぞれのやり方で自分らしさを求めて右往左往している。A が残したいくつかの言葉からは、A が自己の在り方を真剣に見つめ、それゆえに確固とした自分を見出せずにもがいていた様子が見えがえた。多くの他者との関わりの中で、A は自分らしさを求めて揺れ動き、傷つく中でも、「困っている人を助ける、人の役に立ち優しくする」という目標のために、彼らしい行動をいくつもとっていた。その行動は周囲の目には見えないものが多く、彼のそんな目標を知る人はほとんどいなかったが、その行動によって彼の思いを受け止めた人が確実に何人か存在する。

彼の死を考えると、周囲の生徒たちの行為・状態が彼の心に影響を与えたことは否定できない。しかし、教員はじめ、家族、周囲の大人たちが、彼の心のありように少しでも気づき、彼の心の内にそっと寄り添うことはできなかったのか。彼を取り巻いたすべての状況が多かれ少なかれ彼の死に関わり、それぞれが、それぞれの立場で自分を振り返り、自責の念に駆られていることを察する。

どんなに嘆いても彼が戻ることはない。それならば、彼の死を決して無駄にすることなく、彼の死から何を得るのか。今後、一人一人の人間が、人と人との関わりの在り方とかけがいのない命の大切さを、本当に真剣に考え、本校が彼の望んだ「優しさ」に満ちた学校になることを心より望み、本調査委員会としての報告を終える。